校訂金葉集

全

911.135-Ki48-2ウ
1200500755259

始

校訂金葉集目次

緒言　一

本文

春歌　二十六丁

夏歌　三十六丁

秋歌　四十三丁

冬歌　五十四丁

賀歌　五十九丁

別離歌　六十三丁

戀歌上　六十五丁

戀歌下　七十三丁

雜歌上　八十三丁
雜歌下　九十七丁
連歌　百三丁
被除歌　百八丁
異本歌　百十二丁

三条金葉集附錄

校訂金葉集

緒言

八代集中金葉詞花ノ二集ハ巻ノ數各十卽他集ノ半ニ過ギズ。從ヒテ歌ノ數モ少シ

藤原清輔ノ袋草紙二　ニノニ也オ

金葉集和歌六百五△三条金葉集附錄ハ九トス十四首。此外連歌十六首。但流布ノ本是也　白川院御讓位之末俊頼朝臣一人奉ニ院宣一撰レ之。天治元年月日（○崇德院御代）奉レ之大治元二年之間（上○同）上ニ奏之一。此集ノ本不定也。奏覽之處兩度返却。第三度之度以ニ中書ノ草案一先覽レ之。而件ノ本無ニ左右一納畢。仍撰者ノ許ニ無ニ此本一云々。件ノ本在ニ故待賢門院一（○白河院ノ養女ニテ鳥羽院ノ中宮ナリ）而今ノ前ノ大相國（○八條太政大臣實行卽待賢門院ノ兄ナリ）申

覽ノ上奏ノ字ガナカリタルカ

重之モト貫之トアリ今改ム

出書寫之無餘所云々件本兼盛能宣歌並玄々集ノ撰能因拾遺集ノ歌等入之拾遺ハ柄ニ成テ稱弃置之由入之也最前歌重之ガ吉野山峰ノ白雪何消テ」ちかはるらむ○けさは霞のたノ歌也世間ニ流布ノ本ハ第二度ノ本也近代ノ人ノ歌等也最前故將作○修理大夫顯季即清輔ノ祖父打靡○はるさりくれば云々歌也奏覽ノ本ハ造紙○草紙又草子ト書ケルニ同シ云々自筆書之云々時有基俊者兼和漢尤便撰者雖然不奉之若爲御不請之者故歟

同書ニ詞花集ノ事ヲ云ヘル處ニ

金葉集付流布本第三度本歌不除之件本無知人之故也

合鏡村上源氏ノ巻武藏野の草ニ

又覺雅僧都とてもはしき○六條右大臣顯房ノ子ニ歌よみにぞはせし末の世の僧なごさやうによまんはありがたくや侍らん白河院のいとし、もなくはぼしめしたる人にてはしけるに俊頼の君金葉集撰び

△巻ニ詞季ヲ理由

るモトノママ

て奉りたりける始に貫之「春立つことをかすが野の」若菜さへにも知りかなけると云ふ歌其次に覺雅法師とて入り給へりけるを「貫之もめでたしと云ひながら三代集にも漏れ來てあまり古りたり覺雅法師もげにもとも續きはぼえず」なご仰せられければ「古き上手ごも入るまじかりけり又いとしもなくはぼしめす人除くべかりけり」とてはぼえの人をのみ取入れて次の度奉りければ「これもげにもと覺えず」と仰せられければ又作り直して源重之を初に入れたるをぞ留めさせ給ひけるは隱れて世にも廣まらで中たびのが世には散れるなるべし

同書みこたちノ巻源氏の御息所ニ

東宮○白河院の御兄宮と同じ腹に第三の御子たはしき輔仁親王と申しき：：圓宗寺の花を見給ひて

うゐたきし君もなき世に年へたる花や我身のたぐひなるらむ

とよみ給へるこそいと哀に聞え侍りしかゝやうの御歌ども木工ノ頭（カミ）○俊頼の撰びて奉れる金葉集に輔仁のみこと書きたりければ白河院は「いかにこゝに見んほどかくは書きたるぞ」と仰せられければ三宮こそ書き奉れる。御中らひは善くもわはしまさざりしかど

三宮、白河ト仲悪シ、金葉中巻ノ述懐ノ歌ヲ撰ビ入レタリ

も御弟なればなるべし　増鏡あとゝろの下（次ニ引ク）

順徳院ノ八雲御抄ニ

歌員數　金葉十　六百四十九。又連歌

撰者　金葉　天治元年依白川法皇綸言俊頼朝臣撰之。再三改直大治二奏之。披露ノ中度ノ本也

部次第　金葉　春、夏、秋、冬、賀、別、戀上下、雜上下、連歌

子細　金葉　初は入三代集作者。中度流布定。後ノ始ニハ入源重之。有連歌。三箇度撰改。以第二度本流布。多は近世人。但六帖ノ歌並道濟相摸等入之

（六帖初ヲ六十二ハ）

又

金葉第三度本は乍草先奏。而自待賢門院實行下給て披見之間、其外本不留。其本は燒歟。清書ノ時ノ能書也

増鏡　むごろのしたノ巻ニ

又しら川の院たりゐさせ給てのち金葉集かさねて○御在位中ノ後拾遺ニ對シテかさねてト云ヘルナリ　こしよりの朝臣にたほせて撰ばせ給しこそ。はじめそうしたりけるに輔仁の親王の御なのりをかきたるわろしとてかへされ又たてまつれるにもなに事とかやありて三たび奏して後こそをさまりにけれ

右ノ諸書ニ云ヘル如ク金葉集ハ三タビ撰ビシウチ今流布セルハ中

度ノ本ナリ。初度本ト三度本トハイカニナリシカト云フニマヅ三度本ハ續群書類從巻三百六十六ニ收メラレタル外單行本トシテ版行セラレタリ。其本ハ天保九年ニ松田直兄ノ世ニ公ニセシモノニテ附錄ト共ニ大本三冊ニテ下巻ノ末ニ

二冊別ニ附錄一冊トアリシ

仮名自筆ノ奥書アリシ抑此集者白河院御讓位之末俊頼朝臣奉院宣撰之。天治元年奉勅大治元年之間奏之。此集本不定也。奏覽之處兩度返給之。初度進覽本一番三宮御歌也

四ウト又

(年)の(中)に(春)たちくれば(一)こせにふたたびまたるうぐひすの(聲)

第二度進覽本一番顯季卿歌也

うちなびき(春)はきにけり山かはのいはまの氷(こほり)けふやとくらん

本所ニ世間ニ流布ニ也。以上二(箇)度被ニ返ニ下。第三度奏覽本一番歌源重之歌也

本所ニ世間ニ流布ニ也。以上二(箇)度被返下。第三度奏覽本一番歌源重之歌也

よしの山みねのしら雪(ゆき)いつきえてけさは霞(かすみ)のたちかはるらん

今度奏覽本無ニ左右ニ被ニ納了。以ニ撰者之自筆ニ書ニ造紙ニ云々。件本者拾遺集玄々集歌等多以入之。當本即是也。可ニ指南ニ歟

珍重シ 既ニ是シ 直兄ナニアオニ行目

トアリ。傳ニヨレバ原本ノ筆者ハ後京極攝政良經ナリト云フ續群書類從ニハ又初度本トイフヲ收メタレド其巻頭ノ歌ハ流布本ト齊シク顯季ノうちなびき春は來にけりトイフ歌ナリ。抑初度本最前ノ歌ハ今鏡ニヨレバ賀之ノ年のうちに春たつことをかすが野のトイフ歌、三度本即所謂三奏金葉集ノ奥書ニヨレバ輔仁親王ノ年のうちに春たちくれば一こせにトイフ歌ニテ二書ニ云ヘル所相異ナルガ如クナレド其初ニノ句ノ相似タルヲ見レバ同一ノ歌ヲ二樣ニ傳ヘタルナリトオボユ。即初度本ノ一番ハ賀之ノ歌ニカ三宮ノ御歌ニカ知ラ子ド年のうちに春立云々ト云フ歌ナルナリ。カク二書ノ說

ノ相合ヘルヲ見テモ續群書類從ニ收メタル所謂初度本ノ眞ノ初度本ニアラザル事ヲ知ルベシ。サテ三奏金葉集ノ附錄ニ初度の本ひきあはせ見るにいかにも貫之の年のうちに春立ことをみ芳野の」といふ歌はじめにて其次のうた覺雅法師なれば續世繼（即今鏡）のかたしかりけり

ト直兄ノ云ヘルヲ見レバ眞ノ初度本モ世ニ傳ハレリト見ユ

續群書類從中ナル所謂初度本ノ眞ノ初度本ニアラザル事右ニ云ヘルガ如シ。然ラバ其本ノ流布本ト齊シカラザルハ如何。抑中度本ニハ余ノ知レル限ニテモ左ノ五種アリ

第一種　續群書類從中ナル所謂初度本　七五一收上

第二種　北村季吟ノ八代集抄ノ本、正保四年ニ京都吉田四郎右衛門ノ開版セシ二十一代集ノ本、圖書寮所藏舊桂宮御本、同寮所藏

一本（即後ニイフ□本）　陸奥十九首　六九二

第三種　圖書寮所藏一本（即後ニイフハ本）　六七一

第四種　余ノ藏セル慶長十年ノ寫本　六六三

第五種　原六郎氏所藏本　六六〇

歌數ノ最多キハ第一種ニシテ第二種ハ之ヨリ少ク第三種ハ更ニ之ヨリ少ク第四種ハ又更ニ之ヨリ少ク最少キハ第五種ナリ。クハシク云ハバ第一種ヨリ五十九首以上ノ歌ヲ除キタルガ第二種

抑原本　六六七

五十九首以上ト云フハ續群書類從中ナル所謂初度本ハ脫漏極メテ多ク眞ノ歌數ノ知ラレザルガ故ナリ。因ニ云フ金葉集ノ古寫本ハ上下二册ヨリ成リ上卷ニハ春夏秋冬賀ノ歌ヲ收メ下卷ニハ別離、戀上下、雜上下ノ歌ヲ收メタリ。サテ彼所謂初度本ノ他本ト異ナルハ賀以上即古寫本ノ上卷ニ當レル部ノミニテ別離以下ハ全ク

良玉集

第三種本ニ同ジ恐ラクハ下巻ノ缺ケタリシヲ人アリテ第三種本ニヨリテ續貂セシナルベシ

第二種ヨリ二十一首ノ歌ヲ除キタルガ第三種、第三種ヨリハ首ノ歌ト一首ノ連歌トヲ除キタルガ第四種、第四種ヨリハ首ノ歌ヲ除キ新ニ五首ノ歌ヲ加ヘタルガ第五種ナリ。第五種本ノ歌員ハ連歌ヲ除キテ六百六十首ニシテ最袋草紙ニ六百五十四首ト云ヘルニ近シ。恐ラクハ此本即中度ノ奏覧本ナルベシ。彼ハ代集抄ノ本ノ如キハ中度ノ未定稿ノ一ニシテ奏覧ニ至リシ本ニアラズ

袋草紙ニ

撰集之後又集出來事流例也……金葉集之後良玉集出來。顯仲入道撰」之。同除彼集

八雲抄ニ

異名

良玉集十巻　顯仲兵衛佐撰。大治元年。嘲金葉集

本集ノ作者ニ二人ノ顯仲アリ。一ハ源氏、一ハ藤原氏ナリ。左兵衛佐顯仲ハ本集ニ藤原顯仲朝臣トアル人ナリ。良玉集ハ今傳ハラズ

藤原基俊ノ悦目抄（群書類從巻二百九十一）ニ

又かゝる事（忌○禁）も不沙汰なる事も侍り。弘徽殿（コキデン）ノ女御ノ歌合に永成法師が歌に

君が代はすゑのまつ山はるゝ〳〵ことすしら浪の數もしられず

とよめるかへすゝ〳〵も以外の事也。しかれども沙汰なくて金葉集に入る。此歌、集に入れたる撰者大なるあやまりなり。よむ人はとてもかくてもあるべし。集を撰ぶほどの人心得つべき難を見とがめずして入れ侍る事申べきやうもなき失なり。すべて金葉集にはひが事どもありてやう〳〵の名どもつきて沙汰せられ給ふ也。あま

（藤岡、巣佐、鴻本三氏ノ説ニ今ハ悦目抄ノ後人ノ者ヲ基俊ニ假リタルモノナリト云フ）

たの名の中に式部大輔なりつねと申すものひちつきあるじとなづけ申なり。えせ集といふ心也。此君○俊頼は事のたゞへに假字のし文字をだにもしり給はぬ人のさしよるものもなき家にてただ一人うつぶしてえらび給ひたればかくひが事ばかりほきなめりと時の人は申しあへり。是は心せばくわれ一人してしたりといはれんとてしそんじ給へりとぞ人々は沙汰しける

袋草紙ニ

金葉集之時有二種々異名一。其中臂突アルジ第一名云々。是李部五品盛經之所付也

ひちつきあるじノ臂突ハえせものノ形容ニテえせトイフ事ノ隱語、あるじハ即主ニテ假字ハタガヒタレド集ノ隱語ナリ。此名ヲツケシ人悦目抄ニハなりつねトアリ袋草紙ニハ盛經トアリテ相異ナリ(袋草紙ニ李部五品トアル李ハ吏ノ音通ナリ。吏部王記ヲ李部王記ト書クガ如シ。吏部五品ハ即式部大輔ナリ。式部大輔ハ正五位相當ナリ)。案ズルニ金葉集中度本初稿(即第一種本)並ニ詞花集被除歌ニとりつなぐ人もなき野のはる駒は霞にのみやたなびかるらむと云フ歌アリテ作者ハ藤原盛經トアリ。恐ラクハ此人即ソレナルベク悦目抄ニなりつねトアルハもチなト誤レルナルベシ

藤原俊成ノ古來風體抄ニ(本集ノ如ク抄セリ)

どハばナドノ誤カ

金葉集は撰者のさほどの歌人に侍れど歌どももみなよろしく侍をすこし時の花に心のすゝみけるにや當時の人々はじめよりつつきごちたるやうにていかにぞ見え侍なるべし

鳴長明ノ無名抄(群書類從巻二百九十四)ニ

金葉は又わざとをかしからんとして輕々(キヤウキヤウ)なる歌たほかり

八雲御抄ニ

後拾遺金葉集のころよりのちさまの歌たほく平懐なるていなれどぬけてよき歌は又たほし。今もうけられぬふしはあれどよきは又なべての事也

袋草紙ニ　二ノ三十丁オ

撰集ニ秀歌ノ漏ル常ノ事也。惡歌ノ入又不可ニ勝ガテ計ツ歟。……金葉集ニ三首漏。所謂

江帥ノ○大江匡房歌

氷ゐししがのからさきうちこけてさゞなみよする春風ぞふく

故將作ノ○藤原顯季歌

わが戀はよし野の山の奥なれやたもひ入れどもあふ人もなし

師俊卿ノ歌

はりまぢやすまの關屋のいた庇月もれこてやまばらなるなむ

此歌ハはりまぢのニクシ。はりまがたト改テ入ヨト被申ケルヲ作者然テ者不可入云々。仍不入之。予按之かたハ尤神妙。タダシぢニテモ不可除之。相互ニコハキ事也

又

後拾遺ノ時有ニ俊頼基俊不入之。金葉集之時大判事明兼不入シテ腹立チテ俊頼朝臣ノ許ニ來云。不入ニ今度ノ集不可歎ニ遺恨。貴殿遇ニ後拾遺之時ニ而不ニ入之給カドモ今日ハ奉ニ本集ニ給。明兼モ後ノ集ニ罷入事モ候ナント云々。其後詞花集ノ時一首入云々○せきとむる岩間の水もおのづから下にはかよふ物とこそきけ遂ニ宿執了。件人姓中原也。而撰集之度返ニ本姓ニ。坂上ノ是則ノ苗裔之故尊ニ其姓ニ也。有興之

又

經信卿ノ○俊頼ノ父歌云

たほゐ川いは波たかしいかだしよ岸の紅葉にあからめなせそ

後拾遺ニ入レ之。而經信故禮部○後拾遺ノ撰者治部卿通俊ニ乞請テ出レ之。無下人弄歌也。
爲ニ後見一有レ恥。枉テ可レ止云々。仍除レ之。而後年俊頼朝臣入ニ金葉集一如何
今鏡すべらぎの中ノ巻たまづさニ
尊勝寺つくられはべりけるころ○堀河院ノ御代殿上人に華鬘あてられ侍
りけるに俊頼歌人にてはしけるに百首歌案ぜんこすれば五も
じには華鬘（ハナカヅラ）このみたかるゝこと聞かせたまひてふびんの事かなこ
て除かせ給ひけるこそ聞え侍りし。いづれの頃にかありけん南殿（ナデン）
か仁壽殿かにて御覽じつかはしけるに誰にかありけん殿上人の
參りて殿上にのぼりてゐたりければ
雲のうへにくものうへ人のぼりゐぬ
と仰せられけるに俊頼の君
しもさぶらひにさぶらひもせで

とノ上ニといふナドアルベシ

なハはナドノ誤カ

こつけられたりけるを詞ことごこほりたりと聞ゆれど心ばせもあ
る事ときこゆめり。歌の風情いたづらにうする事なりとて連歌を
ば大方せられざりけりと聞え侍りしに金葉集にそいどしもなき
多く集められたる。いたづらに出できたるを惜まれ侍るなるべし。

此處誤脫ナドアルベシ

基俊の君が連歌は
つき草のうつしのもとのくつわ蟲
なごしたるをいふ也。又
から門や此みかごともたゝくかな
なご侍りけり。木工頭○俊頼も高陽院（カヤノヰン）○泰子。鳥羽院ノ皇后の大殿○關白忠實の姫君とき
こえ給ひし時つくりてたてまつり給へりとか聞ゆる和歌のよむ
べきやうなご侍るふみには道信中將の連歌伊勢大輔が
こはえもいはぬ花の色かな○くちなしにちしほハ千しほそめてけり道信

こつけたる事なごいこ優なるこにこそ侍るなれば連歌をも受けぬ事に偏にし給ふこも聞えず。たほかたは見る事聞く事につけてかねてぞよみ設けられける。當座によむこは少く擬作こかきてぞ侍りつる。さて侍りけるにや家集にきゝこ聞き給へりけるこれぼゆるこをよみ集められ侍るめり。これは連歌のついでにうけたまはりし事を申し侍るになん

連歌ハハヤク拾遺集ニ載セタレド連歌トイフ部ヲ設ケテ連歌ヲ殊ニ數多ク載セタルハ本集ガ始ナリ高陽院ニ作リテ奉リシ書トハ所謂俊頼無名抄ナリ。後ニ云フベシ連歌をば大方せられざりけりト云ヘルハ信ケ難シ。家集ナル散木弄歌集ニモ連歌ハアマタ出デタル上ニ其中ニハ人ヤリナラズヨメルモ少カラザレバナリ。但連歌ヲ作ル事ヲ屑シトセザリキト見エテ本集ニ出デタルさもこそはすみのえ

ならめ世ここもにト云フ附句(此句ハ散木集ニヨレバ俊頼ノ作ナリ)ヲよみ人しらずトセリ

長門前司爲經ノ撰ビタル後葉集ニ 哀傷

郁芳門院かくれさせたまひて又のこし藤原こしのぶがもこより

しハもノ誤カ

「うかりしに秋はつきぬこ思ひしをここしも蟲のねこそなかるれ」

こ申てたくりける返事に康資王母

蟲のねはこの秋しもぞなきまさる別のこほくなるこゝちして

この歌の本歌金葉集康資王母こいへるいかなるにか

今鏡村上の源氏ノ巻根あはせニモ

永長元年八月七日(郁芳門院)かくれさせ給ひにき……御めのこ子のまだ若くて廿一こかきこえしも法師になり侍しかなしさはここわりこ申ながらもわかき空にいこあはれにありがたき心なるべし。

日野といふところにすむこぞき〻侍し。次の年の秋むかしの御事
思ひいでてそのこものぶの大徳
かなしさに秋はつきぬと思ひしを今年も蟲のねこそなかるれ
とよみて筑前の御ことて伯の母（○神祇伯康資王ノ母）ときこえしが許に遣したりければ筑前かへし
蟲のねはこの秋しもぞなきまさる別のことほくなるこ〻ちして
と侍りしを金葉集にはき〻あやまりたるにやかきたがへられてぞ侍るなる
ゲニ本集ニハうかりしに秋はつきぬとヲ康資王母歌トシ虫のねはヲ知信ノ歌トセリ。伯母集（即康資王母ノ家集ナリ。神祇伯ノ母ナレバ略シテ伯母トイフ。群書類従巻二百七十八ニ收メラレタリ）ニモ端ヅクリハ無クテうかりしに秋はつきぬとト云フ歌ヲ載セタレドソノ

歌一本ニハ無キ由ナレバ初ニハ無カリシヲ後人ノ金葉集ヨリ書キ加ヘタルナルベシ

袋草紙ニ（三ノ一七オウ）

金葉集ニ顯仲卿ノ鳥とともにぞねはなかれける（○さりともと思ふ限は忍ばれて）ト云句モ一條ノ攝政（○伊尹）集ノ歌也。又今ノ右府入道（○雅定）ノ心をさへもつくしつるかな（○のこりなくくれゆく春をなしむとて）ト云歌モ中比ノ人ノ歌也。入ニ或打聞一。又同集云永縁僧正ノきくたびにめづらしければ郭公（○いつも初音のこゝちこそすれ）ト云歌ハ隆資入道ガ四要講ニ高ノ判官代政業ガ所ノ詠也。而永縁同ノ詠也。政業數月ノ前ニ献ニ之一。故爲ニ彼人歌一。而永縁許云。彼人ノ歌ハ有ニ其數一。予ガ歌ハ是計也。加之列ニ講師之中一。何無ニ會釋一哉云々。結衆僉議シテ隨ニ宜ニ永縁ノ歌一。永公拭ニ感涙一云々。就ニ中秀歌也一。政業ガ不祥歟

もノ字金葉集ニハニトアリ

又

四ノ一二丁右

金葉集ニハ幡ノ別當光清ガ歌ニ云

初例あり 三頁 保延四九三四北五五

なに事にあきはてながらさを鹿の思ひかへして妻をこふらん

此歌ハ藏人ノ君意尊此集撰スル之比十月許ニ參ニ詣ハ幡ニテ聞ニ鹿鳴ニテ詠也。而後日向ニ俊頼ノ亭ニ有ニ忌之事ニ不ニ對面ニ仍紙ノ端ニ書ニ此歌ニテ以ニ小兒ニ一日ノ比於ニ八幡ニ所ニ詠歌也。而光清カ歌ト存テ入ニ之云々

意尊ノ歌ハ又戀ノ部有ニ一首ニ 四ノ一二丁右

也ノ下脱字アルベシ

あはずともなからん世には思出でよわれゆゑ命たえし人ぞこ

是ハ於ニ左京ノ輔顕ニ御許ニテ詠スル歌也。コレハヨミ人シラズトテ入ニ之。一首ハ稱ニ人ノ歌ト一首ハ讀人不ニ知云々。殊ニ阿黨難ニ堪之由所々祈行之者也。尤有ニ謂ハレ

抄本春部ニ

百首の歌の中に初春の心を人にかはりてよめる前齋宮ノ内侍

春のくる夜のまの風のいかなればけさふくにしも氷こくらん

トイフ歌アリ。其作者異本(タトヘバ正保版本)ニ前齋宮ノ河内トアリ。季吟ノ抄ニハ作者部類ノ一本ヲ引キテ河内同人歟云々トシルセリ。前齋宮ノ河内ト同人ナルベシトイフ説ノ起リシハ此歌堀河院百首ニ出デテ前齋宮ノ河内ノヨメル百首ノウチナルガ故ナレドモシ河内ト内侍ト同人ナラバ金葉集ノ撰者ハ端ヅクリニ人に代りてト書クベカラズ。人に代りてトアル上ハ河内ト内侍トハ別人ニテ内侍ガ河内ニ代リテヨメルナリ。諸本ヲ見合スルニ一本(慶長寫本)ニハ

百首の歌の中に初春の心を前齋宮ノ河内

トアリ。コハ私ヲ棄テ公ニ就キテ河内ノ歌トシタルガ故ニ人に代りてトイフコトヲ削リタルナリ。思フニ撰者ノ稿本ニハ抄本ノ如クナルト慶長寫本ノ如クナルト兩樣アリシヲ後人深ク思ハズシテサカ

シラニ内侍ヲ河内ト改メテ正保版本ノ如キ本モ出來シナルベシ。或ハ云ハム前、齋宮、河内ハ堀河百首ノ作者十六人ノ中ニ加ヘラレシバカリノ歌人ナレバ人ニ代作ヲ乞ヒシ事アルベカラズト。答ヘテ云ハム。現ニ袋草紙ニモ

歌仙モ晴ノ時、歌ヲ人ニ乞常、事也。花山院、歌合、時高遠卿令讀好忠。永承ノ時相模申請堀川右大臣○宗頼歌。清正任紀伊守之後申還昇歌ふけ

右モト左トアリ今改ム

ひのうらにゐるたづの○雲ゐにかへらざるべき○あまつ風……なごか忠見二所令讀也。見彼集

隨件歌無清正集

トアル如ク晴ノ歌ナリシ上ニ百首ノ多キヲヨミシ事ナレバ折カラ親シキ友ノヨキ歌ヲヨミタリケムニソヲ乞ヒ受ケテ數ノ中ニ加ヘケム事怪ムベキニアラズ。又本集ニ右ノ歌ノ外ニ前、齋宮、内侍トテ冬、戀上、雜上ニ四首ノ歌ヲ出ダセル外ニ前、齋宮、河内トテ秋、戀下ニ二首

ノ歌ヲ載セタルヲ見テモ内侍ト河内ト同人ニアラザル事ヲ知ルベシ

夏部ニ

承暦二年内裏、歌合に五月雨の心をよめる源通時朝臣

さみだれに玉江の水やまさるらん芦の下葉のかくれゆくかな

トアル歌三奏本ニハ

承暦二年内裏、歌合に五月雨をよめる源、道時、朝臣にかはりて大納言經信

トアリ。又其歌經信ノ家集ニ見エタリ、道時(又通時トアリ)ハ經信ノ子ニテ俊頼ノ兄ナリ

秋部ニ

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて翫池上月といへる事をよませた

まひける院御製

池みづにこよひの月をうつしもて心のまゝにわがものとみる

トアル御製は袋草紙ニ　三ノ三九ウ

是ハ女房堀川殿（大宮右府女）歌也。而内々ニ今日和歌イカガト御尋之處申ニ

此歌。已ニ秀逸ノ歌也。仍仰云。汝ガ歌ニ不似合。爲可我歌トテ御收公云々

トアリ。堀川殿ハ堀川ノ右大臣頼宗ノ孫、大宮ノ右大臣俊家ノ女ナリ

同部ニ

御冷泉御時皇后宮の歌合に駒迎の心をよめる藤原隆經朝臣

ひく駒の數より外にみえつるは關の清水のかげにぞありける

トアル歌ハ天喜四年皇后宮春秋歌合（群書類從巻百八十一及榮華物語根合ノ巻）ニヨレバ下野ノ歌ナリ。恐ラクハ隆經ガ下野ニ代リテ作レルナルベシ

同部ニ

宇治入道前太政大臣の三十講の歌合に月の心をよめる讀人不知

宿からぞ月のひかりもまさりけるよの曇なくすめばなりけり

此歌三奏本ニハ赤染衞門トアリ。ゲニ榮華物語歌合ノ巻ニ見エタル三十講歌合ノ一番ノ右ノ歌ニテ赤染衞門ノ歌ナリ

別離部ニ

源公定が大隅守になりて下りける時月あかゝりける夜別を惜みて讀る源爲成

はるかなる旅の空にもたくれねばうらやましきは秋のよの月

拾遺集別ニ源公貞ガ大隅ヘまかり下りけるにせきこの院にて月のあかゝりけるに別をしみ侍りて平兼盛トアリテ同ジ歌アリ。但流布ノ兼盛集ニハ見エズ

雜部下ニ

人のもとに侍けるに俄にたえいりてうせなんとしければしとみのもとにかきいれて大路にたきたりけるに草の露のあしにさはる程郭公のなくをきゝていきのしたによめる田口重如

草の葉にかゞではしたり郭公しでのやまぢもかくやつゆけき

かくてつひにたちいるとてよめる

たゆみなく心をかくるみだほとけひとやりならぬ誓たがふな

二首トモニ重如ノ歌トセルナリ然ルニ袋草紙ニハ　ロ/三四オ

蓮仲草のはに……是ハ人ノモトニテ俄ニ絶入タルヲカキイダシタリケルトキイキイデテ草ノ露ノアシニサハリケルニ郭公ノナクヲキキテヨメルナリ

河口ノ重如號ニ山二郎判官代たゆみなくたのみをかくる……是モ死ナムトシケル時讀ル也

ロハ内ノ誤ナルベシ

トアリテ草の葉にヲ蓮仲ノ歌トシたゆみなくヲ重如ノ歌トセリ俊頼無名抄ニハ

卽内大臣ごの伊周○藤原と申ける人のもとにて俄にしにければしとみのもとにかきのせて大路にたきたりけるに郭公のなきすぎけるをきゝてよめる草の葉に……

トアリテ作者ノ名ナシ蓮仲ハ叡山ノ法師ニテ後拾遺ノ作者ナリ重如ノ氏ヲ田口トセルモ疑ハシ三奏金葉集ニハ山口重如トアリ(後拾遺集ニモ山口重如トテアリ)袋草紙ニ山二郎トアレバ山口ヤ正シカラム河内ハ氏ニアラズ河内ノ國人ナルナリ袋草紙ノ別處ニ　三/四オ

河内重如ハ號ニ山次郎判官代下賤ノ者也……月夜ニハ河内國ヨリ毎夜ニスミノエニユキテ夜ヲアカスト云々

トアルニヨリテ知ラル

△ハヤク拾遺集ニ見エタル歌ニシテ本集ニ重出セルモノ三首

題しらずよみ人しらず○別雅

たくれゐてわがこひをれば白雲のたなびく山をけふやこゆらん

右ハモト萬葉集ニ出デタル歌ナリ

源公定が大隅守になりて下りける時月あかくりける夜別をしみてよめる源爲成○同上

はるかなる旅の空にもたくれねばうらやましきは秋のよの月

對馬守にて小槻のあきみちが下りける時つかはしける共政朝臣妻○同上

たきつしま雲ゐの岸をゆき返り文かよはさんまぼろしもがな

右ノ外

題しらずよみ人しらず○流布本戀下

うゝまましやこのした蔭のわすれ水いくらの人の影をみつらん

コレモ拾遺集ニ出デタレド本集ノ奏覽本ニハ除カレタリ(拾遺ニハあさましや木のしたかげの岩しみづいくそのの人のかげをみつらんトアリ)又

寄夢戀をよめる源行宗朝臣○戀下

つらかりし心ならひに逢見てもなほ夢かとぞうたがはれける

コノ歌ハハヤク本集戀上ニ出デテソコニハ後朝の心をよめるトアリ但一首ノ調後朝ノ心ニカナハズサレバ題ハ寄夢戀トアルニ從フベシ

大日本史卷二百二十一歌人列傳に

源俊頼大納言經信子也仕堀河鳥羽崇徳三朝任右近衛少將兼木工

權頭左京權大夫進叙四位上多才藝（中右記、尊卑分脈）最善和歌。苦意刻思不輒下語。凡有感觸所得者往々書藏之時出而用之。以故無苟且艱澁之失。造意新奇體製溫雅。一時士人推爲宗師。（參取八雲御鈔、今鏡、鴨長明無名鈔）藤原實行嘗與藤原長實論躬恒貫之之優劣久之不決。長實問之白河上皇。上皇曰。朕何容易辨之。宜質於俊頼。俊頼點頭曰。躬恒不可輕視。長實以告俊頼。俊頼又曰。躬恒不可輕視。俊頼蓋有深意不欲顯言實曰。然則貫之劣乎。俊頼又曰。躬恒不可輕視。俊頼蓋有深意不欲顯言之也。（鴨長明無名鈔）藤原顯季祭柿本人麻呂。名輩畢集。顯季謂俊頼曰。卿爲當世宗匠。宜莫初獻。其見推許如此。（古今著聞集、十訓鈔）凡朝廷及諸家歌合多推俊頼爲判者。俊頼常謂判和歌者非備十德則不能也。所謂德望門地明辨强記之類也。（十訓鈔）天治初奉勅撰金葉和歌集。（袋草子、八雲御鈔、今鏡）俊頼素不好連歌。以爲害於和歌體。而至撰金葉集則多載之。又以高陽院命纂和歌可矜式者上之。亦載連歌。蓋欲不遺人之美也。（今鏡）時藤原基俊亦善和歌。與俊頼爭能不相能。（鴨長明無名鈔、八雲御鈔）嘗謂人曰。俊頼無文才而善和歌。猶駒兒善走況其不繼也。俊頼聞之曰。如文時朝綱才學博洽。然未聞有秀歌。躬恒貫之詩名無聞。而不害善和歌也。基俊之言不亦誣乎。基俊負才高自標置。方其判歌常極口評駁。而才不掩言時有麤率之失。俊頼資性溫厚。人多愛之者。以故時譽益歸焉。（鴨長明無名鈔）每有乞題詠者。稍覺其難則先使家人子弟作之而擇其詞意可採者潤色以爲己作。以故俊逸甚多。（俊烏羽帝口傳）嘗與同僚遊大原。中路遽下馬。衆怪問之。俊頼曰。是良暹法師之舊址。衆皆下馬。良暹蓋以和歌聞者也。其篤志如此。（袋草子）所著有山木髓腦、無名抄（鴨長明無名鈔、仁和寺書籍目錄）子僧俊慧亦工和歌。（尊卑分脈、鴨長明無名鈔）頗有父風。爲時所推重。（鴨長明無名鈔）著歌苑鈔歌撰合。（仁和寺書籍目錄）藤原俊成嘗曰。俊頼之歌鍛鍊精巧無疵瑕之可指。俊慧之歌亦爲至巧。然比其父不及遠矣（鴨長明無名鈔）俊頼卒セシ年月モ享年モ明ナラズ。サレド散木弃歌集二

七十になりて後むかし見し人のもとにまかりてふるき物がたり
なごしけるついでによめる
かぞふれば車をかくる齢にてなほこの世にぞめぐりきにける
トアルニテ七十歳ニ達セシコトヲ知ルベクナホ本集ノ奥ニ
七十になるまでつかさもなくてよろづにあやしき事を思ひつづ
けて源俊頼朝臣
なゝそぢにみちぬるしほの濱ひさぎ久しく世にもうもれぬる哉
トアルニテ本集ヲ撰ビシハヤガテソノ七十歳ノ頃ナリシ事ヲ知ル
ベク又袋草紙ニ
金葉名予心中ニ傾思其故ハ自同見之處佛欲入涅槃之時先世間ニ
金葉花雨云々以之思之金葉ノ世間ニ流布不吉歟而此集之後無程
白河院崩御撰者又逝去

自同見モトノマヽ

トアルニテ七十餘歳ニテ卒セシ事ヲ知ルベシ
尊卑分脈ニ
宇多源氏敦實親王重信道方經信俊頼木工權頭右少將左京大夫從
四位上歌仙筆簗金葉以下代々集作者金葉集撰者
俊頼ノ家集ヲ散木弄歌集トイヒ其著ニ山木髄脳アルヲ思ヘバ號ヲ
散木ト云ヒシガ如シ(山木ハ散木ノ音通ナル事明ナリ散木ハ莊子ニ
見エタル語ニテ無用ノ材トイフコトナリ)
散木弄歌集　群書類從巻二百五十四ニ收メラレタル十巻三冊本ノ
外村上忠順ガ標注ヲ加ヘテ世ニ公ニセシ四冊本アリ
俊頼無名抄　八雲抄ニ公任ノ新撰髄脳、能因歌枕、仲實ノ綺語抄、清輔
ノ奥儀抄ト共ニ五家髄脳トテ擧ゲタマヘリ無名抄トイフ名ヲ見テ
知ラルヽ如クモト名ナカリシカバ後人此書ヲ引クニ當リテ俊頼ロ

傳、俊頼ノ抄、俊頼ノ抄物、俊頼髄脳、俊秘鈔ナドマチマチニ云ヘリ。巻ノ數ニ。此頃國書刊行會ニテ刊行セシ續々群書類從巻十五ニ入レリ

山木髄脳　八雲御抄ニ俊頼無名抄ノ外ニ山木髄脳俊頼ト載セラレタレド前ニ云ヒシ如ク山木ハ即散木ニテ俊頼ノ號ナルベク又抄トイフモ髄脳トイフモ異ナル事ナケレバ(顯昭ノ袖中抄ニハ俊頼無名抄ト書キテ俊頼髄脳ト註セリ)山木髄脳トイフモノ別ニアルニハアラデヤガテ所謂無名抄ノ事ナルベシ。八雲抄ハ和歌色葉集ニ

佐佐木信綱氏ノ考證ニヨレバ和歌色葉集ハ偽書ニアラズ又後人書中ニ追加アリノ云フ

俊頼山木髄脳無名抄。此髄脳を難じて法輪入道となのるは大宮大相國伊道歟とうたがふ

トアルニヨラレタリト見ユレド色葉集ハ一書トセルニ似タリ

袋草紙ニ

又歌有詠吾事。今ノ殿下ニテ通忠俊頼朝臣詠卯花歌云

長明無名抄ニモアリ後ニ畧ゲベシ

卯花のみなしらがこもみゆるかな賤が垣根もこしよりにけり

位署不書シテ献之。人々奇思之處其名載歌中云々。是獨歩之時事也

又

俊重、君（俊頼ノ子俊恵ノ兄）於或宮原談女房于時持藤花。女ノ云ソレガウラバト云々。俊重不知其故。默而止了。後日其由ヲ語嚴閣（父ヲイフ）俊頼云。後撰ニ藤のうらばのうらごけて（はるる日さす：：君し思はばわれもたのまむ）ト云歌不知歟如何。答云。知給候。藤ヲ持タルヲ見テソレガウラバト云ハ非件歌之意哉。如此事不能教事云々

又

詫中自作ハ善惡尤難辨事也。上手モ然歟。俊頼朝臣吾詠歌中稱秀歌和歌卅首計ヲ書出。其中不甘心歌多入之。秀歌又多不入之

又

又難後拾遺ト云物アリ。世以稱經信卿之所爲。而近年俊頼朝臣ノ息子僧俊恵相語云。吾姉、女房逝去之後彼遺物ヲ開見之處故頭、○本ニ頭俊頼遺草少々。其中有件難後拾遺之草案。故頭之手跡也。若彼所爲歟云々。予按之若以帥、○太宰帥經信口狀執筆之間草歟

又

俊頼歌ニ

水の海とたつる涙はなりにけりこひしき人もなみとき〻しに

故公實卿云。みづのうみノのノ字ハオソロシクオケルモノカナ。後生ハ難置字ヲト云々

此歌散木集ニハあふべきしほもなきときくよりカカハ通ゼズデ但なきハなしトアルベシ

又

俊頼歌云

信濃なるきそぢの櫻さきにけり風のはふりにすきまあらすな

是ハ信濃國ハ極風早キ所也。仍スハノ明神ノ社ニ風ノ祝ト云物ヲ置テ是ヲ春ノ始ニ深物ニ籠居テ祝シテ百日之間尊重スルナリ。然者其年凡風閑ニテ爲農業吉也。自ラスキマモアリ日光モ令見ツレバ風不納云々。其意也。是ハ能登大夫資基ト云人俊頼ニ語云。如此事承之。歌ニ讀マント思也云々。俊頼答云。無下ノ世俗ノ事也。如此事更々不可詠。不便云々。仍存其由之處後日詠之。尤腹黒事歟。五品○資基後悔云々

又

仁和寺一品ノ宮○後三條院皇女聰子參詣天王寺之時御供ノ人令參住吉詠和歌。俊頼ノ君歌ニ云

いくかへり花さきぬらん住よしの松も神代のものとこそきけ

故將作○顯季當座ニ難云。まつは神代のト可侍ト云々。俊頼無左右答。

予案之共以有理有興

悅目抄ニハ白河院ノ御方ヘ御ノ御ノ時ノ事トセリ

又

俊頼ノ君云。折節ニカナヒタル歌ヲ詠スルハヨムニハマサレル也。先年前齋宮○倫子内親王伊勢ヨリ皈京之時御供ニ候ス。ヨドノワタリニ御船付テ人人不寝アカスアヒダムカヒノ市ニ郭公一聲ナキ行。万人斷腸。自御船ハ女房ノ聲ニ窮ニよどのわたりのまだよふかきに○拾遺忠見いづ方になきてゆくらん ほとゝぎす ト詠タリシ臨ミテ時メデタカリシ者也。人々感歎シテ今ニ難忘云々

長明無名抄ニ

富家ノ入道殿○忠實ニ俊頼朝臣候ひける日かがみ○近江ノ地名のくぐつごもまゐりて歌つかうまつりけるにかみ歌になりて

世の中はうき身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり

この歌をうたひたりければ俊頼いたり候にけりなこてゐたりけるなんいみじかりける。永縁僧正この事をつたへきゝて羨みて琵琶法師どもをかたらひてさま〳〵物どもこらせなどしてわがよみたる「いつもはつねのこゝちこそすれ」○きくたびにめづらしければほとゝぎす といふ歌をこゝかしこにて歌はせければ時の人ありがたきすき人となんいひける。いまの敦頼入道またこれをきゝてうらやましくや思ひけん物も取らせずしてめくらごもにうたへ〳〵こせめうたはせて世の人に笑はれけるとぞ

又

法性寺ごの○忠通ノ家に會ありけるとき俊頼朝臣まゐりたりけり。兼昌講師にて歌よみあぐるに俊頼のうたに名をかゝざりければ見合せてうちしはぶきて御名はいかにとしのびやかにいひけるをただよみたまへと云はれければよみけるに

卯花の皆しらがども見ゆるかなしづが垣根もとしよりにけり

こかきたりけるを兼昌したなきして頻にうなづきつゝめで感じけり。殿きかせたまひて召して御覽じていみじう興ぜさせ給ひてけり

又

雲居寺(クヰヨジ)の聖(上人)〇聴西のもとにて秋のくれの心を俊頼朝臣

あけぬともなほ秋風の音づれて野べのけしきよ面がはりすな

名を隱したりけれどもこれをさよと心得て基俊いどむ人にて難じていはく。いかにも歌は腰の句の末にて文字するゐつるにはかばかしき事なし。さゝへていみじくきゝにくきものなり。ゴロあかすべくもなく難ぜられければ俊頼はこもかくも云はれざりけり。其座に伊勢のきみ琳賢がゐたりけるなんこゝやうなる證歌こそひとつたぼえ侍れといひいでたりければいで〳〵うけたまはらん。よもことよろしき歌にはあらじ。いふに「さくらちるこのした風はさむからで」〇空にしられぬ雪ぞふりける貫之ことはてのて文字をなが〳〵ことながめたるに色まさをになりて物もいはずうつぶきたりける時に俊頼しのびやかに笑はれけるこそ

又

俊恵云。法性寺殿にて歌合ありけるに俊頼基俊ふたり判者にて名をかかずして當座に判しけるに俊頼歌に

くちをしや雲居がくれにすむたつも思ふ人には見えける物を

これを基俊鶴と心得てたづは澤にこそすめ。雲ゐにすむことやはある。と難じて負になしてけり。されど俊頼その座にてはことばも加へず。そのとき殿下こよひの判の詞たの〳〵書きてまゐらせよ

と被仰けるときなん俊頼朝臣これは鶴にはあらず。龍なり。かのなにがし○公葉とかやが龍を見むと思つる心ざし深かりけるによりかれが爲に顯れて見えたりし事の侍るをよめるなり。と書きたりけり。基俊弘才の人なれど思はかりもなく人の事を難ずる癖の侍りければ事にふれて失たほくぞありける

同ジ無名抄ニ

五條三位入道○成俊云。俊恵は當世の上手なり。されど俊頼にはなほたよびがたし。俊頼は思ひいたらぬくまなく一方ならずよめるが力も及ばぬなり。今の世には頼政こそいみじき上手なれ。かれだに座にあれば目のかけられてかれに事ひとつせられぬとたぼゆるなり

後鳥羽院御口傳(群書類從巻二百九十二)ニ

又俊頼堪能のものなり。歌すがた二様によめり。うるはしくやさしきやうもことに多く見ゆ。又もみ〳〵と人はえよみたほせぬ様なる姿もあり。此一様すなはち定家卿の庶幾するすがた也

うかりける人をはつせの山たろしよはげしかれとは祈らぬ物を

此姿なり。又

うづらなくまの〻入江のはま風に尾花なみよる秋のゆふぐれ

うるはしきすがたなり。故土御門内府○通親亭にて影供のありしに釋阿○成俊これほどの歌たやすくは出來しがたしと申き。道を執したる事も深かりけり。かたき結題を人のよませけるには家の中のものに其題をよませてよき風情たのづからあれば夫を才覺にてよく引なほしてたほくの秀歌ごもよみたりけり

定家ノ近代秀歌(同上)ニ

末の世の歌はたとへば田夫の花のかげをさり商人の鮮衣をぬげるが如し。しかれども大納言經信卿、俊頼朝臣、左京大夫顯輔卿、清輔朝臣、近くは亡父卿○俊成則此みちを習侍ける基俊と申ける人此ともがら末の世のいやしき姿をはなれて常にふるき歌をこひねがへり。此人々の思ひ入てすがた勝れたる歌は高き世にも及てや侍らん

又俊頼ノ歌八首ヲ擧ゲテ

山ざくらさきそめしよりひさかたの雲ゐにみゆる瀧のしら絲
たちたぎつやそうぢ川の早き瀬に岩こす波はちよのかずかも

是ははれの歌秀歌の本體と申べきにや

うづらなく眞野の入江のはま風に尾花なみよるあきのゆふ暮
ふる里はちるもみぢばにうづもれて軒のしのぶに秋風ぞふく

是は幽玄にたもかげかすかにさびしきやうなり

あすもこむのぢのたまがは萩こえて色なる波に月やどりけり
たもひ草はずゐに結ぶ白露のたま〳〵きては手にもたまらず

是は面白見處ある上手のしごとみゆ

うかりける人を初瀬の山たろしよはげしかれとは祈らぬ物を
とへかしな玉ぐしの葉にみがくれて鵙の草ぐきめぢならずとも

是は心ふかくことば心にまかせてまねぶともいひつぐけがたくまことに及ぶまじき姿也

定家卿密勘古今戀二河の瀬になびくたま藻のみかくれてトイフ歌ノ註二

俊頼朝臣はすべて證歌をひかへ道理を正して歌をよまぬ人にて侍る也。其身堪能至りていひこいふ事皆秀歌の體也。帥大納言○經信の子にて殊勝のうたよみ父子二代雙ぶ人なきに似たり。又年老て

後いよ〳〵此道にかたはらに人なしこれもひて心の泉のわくにまかせて風情のよりくるにしたがひてたぢす憚らずいひつづけたるがそしり難ずべきことわりも思ひつゞけられずあな面白かくこそはいはめと見ゆれば時の人も後の人もゆるしつればやがて先例證歌になりて用ひ侍るなり。そのほゞに面白く上手にみゆ（みゆモトノママ）ざらん人は思ひよるまじきこゝ也。「さくらあさのをふのうらなみ」（○散水集……たちかへりみれどもあかぬ山なしの花）なゞいふこゝもそれより前には見及び侍らず。ものを（ものモトノママ）人のくせと思ひなして信仰するばかりなり。されば基俊は歌は俊頼に損ぜられぬるぞかし。まなび給ふな。眞名の文字もかゝず知りたる事もなきまゝにわらはべの語る事につきて無邊法界のいたづらごと歌によみちらすものぞ。歌の外道なり。こゝ常に侍ける。亡父（○俊成）は師匠金吾（○左衛門佐基俊）のいはれし事なれど歌をよまん人

俊頼をもごきては三十一字はいたづらごとになりなんとぞ申されし侍し。雙びたる人は其短を見る。後の人はこのみにしたがふなり

八雲抄ニ

然を基俊といふもの此道の稽古ありて俊頼にときぐ〴〵爭ふをりあり。然ばいまの世まで二の流たりといへどもその骨（コツ）俊頼に及ぶべからず。天下に肩をならぶるものなくて俊頼數年を經たり

ト云ヘリ

此校訂金葉集ハ諸本中最廣ク世ニ行ハレタル北村季吟ノ八代集抄ノ本ヲ藍本トシ左ノ諸本ヲ以テ校訂シタリ

イ　宮内省圖書寮所藏舊桂宮御本

ロ　同寮所藏本

奥書ニ寛文八年正月……山田隱士冬木翁トアリ

ハ　同寮所藏一本
ニ　原六郎氏所藏本
ホ　余ノ藏セル本
　慶長十年晩月中一日書寫之畢トアリ
ヘ　續群書類從ニ出デタル所謂初度本
ト　松田直兄ノ世ニ公ニセシ三奏金葉集
チ　正保版本
リ　古來風體抄

余ハ茲ニ謹ミテ宮内省圖書寮及原六郎氏ノ貴重ナル書籍ヲ貸與セラレ又理學士白井光太郎君ノ慶長寫本ヲ、岡山高蔭君ノ正保版本ヲ寄贈セラレテ余ノ校訂本ヲ作ルヲ助ケラレシヲ謝ス

明治四十二年十月　　醫學博士井上通泰

金葉和歌集巻第一

春歌本ニヨリテハ春部トアリ以下皆然リ

春歌

堀河院の御時百首の歌めしけるに立春の心をよみ侍ける　　修理大夫顯季

うちなびき春はきにけりやま川のいはまのこほりけふやとくらん

春宮大夫公實

春たちてこずゑにきえぬしら雪はまだきにさけるはなかとぞみる

藤原顯仲朝臣

いつしかとあけゆく空のかすめるはあまの戸よりや春はたつらん

皇后宮肥後

つらゝゐしほそだに川のとけゆくはみなかみよりや春はたつらん

百首の歌の中に初春の心を人にかはりてよめる　前齋宮内侍

春のくる夜のまの風のいかなればけさふくにしもこほりとくらん

初春の心を讀る　太宰大貳長實

いつしかと春のしるしにたつものはあしたの原のかすみなりけり

正月ついたち雪のふり侍ければつかはしける　修理大夫顯季

あらたまの年のはじめにふりしけばはつ雪ここそいふべかりけれ

かへし　春宮大夫公實

朝戸あけてはるのこずゑの雪みればはつ花ともやいふべかるらん

實行卿の家の歌合に霞の心をよめる

イハロハチニ前齋宮河内ハアルヲロトシホルニ人にかはりてよめる事ナクテ云フ前齋宮河内ハヨロトシナルハヨ緒言作者考證ノ條チ見ルベシ

あさみどりかすめるそらの氣色にやときはの山もはるをしるらん　少將公教母

こしごとにかはらぬものは春がすみたつたの山のけしきなりけり　藤原顯輔朝臣

霞の心を讀る

あづさ弓はるのけしきになりにけりいるさの山にかすみたなびく　太宰大貳長實

百首の歌の中に鶯の心をよめる　修理大夫顯季

うぐひすのなくにつけてやまがねふくきびの山人はるをしるらん

初聞鶯といへる事をよめる　春宮大夫公實

けふよりや梅のたちえにうぐひすのこゑ里なるゝはじめなるらん

正月八日春立けるに鶯の鳴けるを聞てよめる　藤原顯輔朝臣

ニモト日トアリ今イハトニヨル

けふやさば雪うちとけてうぐひすのみやこにいづる初音なるらん

あかつき鶯をきくといふ事をよめる　源雅兼朝臣

うぐひすの木づたふさまもゆかしきにいま一聲はあけはてゝなけ

皇后宮にて人々歌つかうまつりけるに雨中鶯といふ事をよめる　源俊頼朝臣

春雨はふりしむれどもうぐひすの聲はしをれぬものにぞありける

良暹法師忍びて物へまかりけるに左大辨經頼が家の梅さかりに咲たりければ門にひねもすに立くらして夕つかたいひいれ侍ける　良暹法師

（咲ノ下ニイハニホヘトニヨリテたリチ加フ）

梅のはなにほふあたりはよきてこそいそぐ道をばゆくべかりけれ

梅花夜芳といへることをよめる　前太宰大貳長房

（芳イハホヘトニ薫トアリ）

うめが枝にかぜやふくらん春のよはをらぬ袖さへにほひぬるかな

朱雀院に人々まかりて閑庭梅花といへる事をよめる　大納言經信

けふこゝに見にこざりせば梅のはなひとりや春のかぜにちらまし

道雅卿家歌合に梅花をよめる　藤原兼房朝臣

ちりかゝる影はみゆれどうめの花みづには香こそうつらざりけれ

梅花をよめる　源忠季

かぎりありてちりはつとも梅のはな香をば梢にのこせとぞ思ふ

子日の心を讀る　大中臣公長朝臣

春日野のねの日のまつはひかでこそ神さびゆかんかげにかくれめ

百首歌の中に子日の心をよめる　大藏卿匡房

春がすみたちかくせどもひめ小松ひくまの野べにわれはきにけり

柳絲隨風といふことをよませ給ひける

院御製（白河）

かぜふけばやなぎの絲のかたよりになびくにつけてすぐる春かな

百首の歌の中に柳をよめる　春宮大夫公實

あさまだきふきくる風にまかすればかたよりしけるあをやぎの絲（イニヘニるリトアリ）

池邊柳をよめる　源雅兼朝臣

かぜふけば波のあやたるいけみづに絲ひきそふるさきしのあをやぎ

呼子鳥を讀る　前齋院尾張

いづこか山くるひともなきゆふ暮にこゝろぼそくもよぶこどりかな

霞中歸雁といへる事をよめる　藤原成通朝臣

聲せずはいかでしらましはるがすみへだつる空にかへるかりがね

歸雁をよめる　藤原經通朝臣

今はとてこしぢに歸るかりがねはねもたゆくやゆきかゝるらん

花薫風といふ心をよみ侍ける　攝政左大臣（藤原忠通）

よしの山みねのさくらやさきぬらんふもとの里にほふはるかぜ

白河の花見の御幸に　新院御製（鳥羽）

たづねつるわれをや花もまちつらんけふぞさかりに匂ひましける（イロハニホヘトニいまトアリ）

太政大臣（源雅實）

しらかはのながれ久しきやどなれば花のにほひものごけかりけり

人にかはりて讀る　太宰大貳長實

ふくかぜも花のあたりはこゝろせよけふをばつねの春こやはみる

待賢門院兵衛

よろづ代のためしと見ゆる花の色をうつしとゞめよしら川のみづ

源雅兼朝臣

ことしことにさきそふ宿のさくら花なほゆくすゑのはるぞゆかしき

宇治前太政大臣京極の家の御幸の日讀ませ給ける　院御製

春がすみたちかへるべきそらぞなき花のにほひにこゝろとまりて

遠山櫻といへる事をよめる　春宮大夫公實

しら雲とをちの高根にみえつるはこゝろまどはすさくらなりけり

（にもトのアリ今ニホヘトニヨル）

松間櫻花といへる事をよめる　内大臣（源有仁）

はるごとに松のみどりにうづもれて風にしられぬはなざくらかな

左兵衛督實能

このはるはのどかにほへさくら花えださしかはす松のしるしに

花爲春友といへるこゝをよめる　内大臣

ちらぬまは花をともにてすぎぬべしはるよりのちのしる人もがな

新院御方にて花契遐年といへる事をよめる　待賢門院中納言

しら雲にまがふさくらのこずゑにてちゝせの春をそらにしるかな

（にもトのアリ今イロハニホヘトチニヨル）

藤原顯輔朝臣

よろづ代にみるべき花の色なれゝけふのにほひをいつかわすれん

終日尋花といふ事をよめる　源貞亮朝臣

しら雲にまがふさくらをたづぬとてかゝらぬ山のなかりつるかな

堀河院御時女房たちを花山の花見せにつかはしたりけるにかへりまゐりて御前にて歌つかうまつりける

に女房にかはりてよませ給ける　堀河院御製

よそにては岩こす瀧とみゆるかなみねのさくらやさかりなるらん

源師俊朝臣

けふくれぬあすもきて見んさくらばなこゝろしてふけ春のやま風

山花を翫ぶといへる事をよめる　太宰大貳長實

かぐみ山うつろふ花をみてしよりたもかげにのみたゝぬ日ぞなき

深山花を　攝政左大臣

みねつぐきにほふ櫻をしるべにて知らぬやま路にまごひぬるかな（まごひロホヘニかくりトアリ）

人々に櫻の歌十首よませ侍けるによめる　修理大夫顯季

さくらばなさきぬるときはよしの山たちものぼらぬみねのしら雲

山花留人といふ事をよめる　大中臣公長朝臣

斧のえは木のもとにてやくちなまし春をかぎらぬさくらなりせば

宇治前太政大臣家の歌合に櫻をよめる　皇后宮攝津

ちりつもる庭をぞみましさくらばな風よりさきにたづねざりせば

源俊頼朝臣

やまざくらさきそめしより久かたのくもゐに見ゆるたきのしら絲

遙見山花といへることをよめる　大藏卿匡房

はつせ山くもゐにはなのさきぬればあまの川なみたつかとぞ見る

藤原忠隆

よしの山みねになみよるしら雲とみゆるははなのこずゑなりけり

堀河院御時女御の御かたの女房あまたぐして花見あ（ハニホヘニヨリテあまたノ下ニぐしてヲ補フ）りきけるによめる　前齋宮筑前乳母

春ごとにあかぬにほひをさくらばないかなる風のをしまざるらん

人にかはりてよめる　僧正行尊

よそにてはをしみにきつる花なれどをらではえこそ歸らざりけれ（モトるまじトアリ今ハヘニヨル）

後冷泉院御時皇后宮の歌合に櫻をよめる

堀河右大臣（藤原頼宗）

春さめにぬれてたづねんやまざくら雲のかへしのあらしもぞふく

月前見花といふこゝろをよめる　大藏卿匡房

つきかげに花見るよはのうきくもは風のつらさにたゞらざりけり

顯季卿の家にて櫻の歌十首人々によませ侍けるによめる　太宰大貳長實

はるの日ののどけき空にふるゆきは風にみだるゝ花にぞありける

水上落花といへる事をよめる　源雅兼朝臣

花さそふあらしやみねをわたるらんさくらなみよる谷がはのみづ

落花滿庭といへる事をよめる　左兵衛督實能

けさ見れば夜はのあらしにちりはてゝ庭こそ花のさかりなりけれ

堀河院御時中宮の御方にて風靜花芳（カウバシ）といへる事をつかうまつれる　源俊頼朝臣

こずゑにはふくとも見えでさくら花かをるぞ風のしるしなりける

落花の心をよめる　長實卿母

春ごとにたなびさくらの花なればをしむこゝろもかはらざりけり

落花隨風といふこゝろをよめる　右兵衛督伊通

うらやましいかにふけばか春かぜの花をこゝろにまかせそめけん

水上落花といへる心をよめる　大納言經信

みなかみに花やちるらんやま河のゐぐひにいさぐかゝるしらなみ

藤原成通朝臣

水のたもにちりつむ花をみるときぞはじめて風はうれしかりける（ときイロハトニをりトアリ）

落花衣にちるといへることをよめる

ちりかゝるけしきは雪のこゝちしてはなには袖のぬれぬなりけり

藤原ノ永實

堀河院ノ御時花のちりたるをかきあつめてたほきなる物のふたに山のかたにつませ給ひて中宮の御かたに奉らせ給へりけるを宮御覽じて歌よめとたほせごと

有ければつかうまつれる　御匣殿（クシゲドノ）

さくらばな雲かゝるまでかきつめてよしの〻山とけふはみるかな

花の庭にちりつもりたるを見てよめる

郁芳門院ノ安藝

にはのはなもとの梢にふきかへせちらすのみやはこゝろなるべき

夜思落花（ること）といへるこゝをよめる　隆源法師

ころもでにひるはちりつむ櫻（る）ばなよるはこゝろにかゝるなりけり

（むイヘトニるトアリ）

春物へまかりけるに山田つくるをみてよみ侍ける

高階ノ經成ノ朝臣

さくらさく山田をつくるしづのをはかへすゞやはなを見るらん

後冷泉院ノ御時月のあかゝりける夜女房御供（たちをぐし）にて南殿にわたらせ給ひたりけるに庭の花かつちりて面白かりけるを御覽じて是を見知たらん人に見せばやとてほせごと有て中宮の御方に下野やあらんとてめしにつかはしたりければまゐりたるを御覽じてあの花折てまゐれと仰せごと有ければをりてまゐりたるをたゞにてはいかゞとたほせごとありければつかうまつりける

下野

はるの夜の月のひかりのなかりせば雲ゐのはなをいかでをらまし

（御供ニニホヘトニたちなぐしトアリ）

（知ノ上ニイニホヘトニヨリテ見ヲ加フ）

（てノ字イロハニホニ無シ）

（はるのロニヘトチニながきトアリ）

御かたイハニホヘトニ北面又ハきたおもてトアリ

新院の御かた北面にて殘花薫風(カウハシ)といへる事を讀る　中納言雅定

ちりはてぬ花のありかをしらすればいとひし風ぞけふはうれしき

ならにて人々百首、歌よみけるに早蕨をよめる　權僧正永縁

山ざとは野べのさわらびもえいづるをりにのみこそ人はとひけれ

百首の歌の中に杜若を　修理、大夫顯季

あづま路のかほやが沼のかきつばた春をこめてもさきにけるかな

春の田をよめる　大納言經信

あら小田にほそ谷がはをまかすればひくしめ繩にもりつゝぞゆく

苗代をよめる　津守(ツモリ)、國基

鳴のゐる野ざはの小田をうちかへし種まきてけりしめはへてみゆ

後冷泉院、御時弘徽殿(コキデン)、女御の歌合に苗代を讀る　藤原、隆資

やま里のそこもの小田のなはしろにいは間の水をせかぬ日ぞなき

家の山吹を人々あまたまうできてあそびけるついで

に折けるをみてよめる　中納言雅定

わがやどにまたこん人も見るばかりをりなやつしそやまぶきの花

やつイニホニつくトアリ

水邊、款冬を　攝政左大臣

かぎりありてちるだにをしき山吹をいたくなをりそゐでのかはなみ

イハニホヘニヨリテをチ加フ

はるふかみかみなびがはに影みえてうつろひにけり山ぶきのはな

後冷泉院、御時、歌合に山吹をよめる　前、太宰、大貳長房

山ぶきにふきくるかぜも心あらば八重ながらをばちらさぐらなん

晩見躑躅（ユフベニ）といへることをよめる　攝政左大臣家参河

いり日さすゆふぐれなるの色はえて山したてらすいはつゝじかな

院の北面（キタオモテ）にて橋上藤花といへることをよめる　大夫典侍（スケ）

いろかへぬ松によそへてあづまぢの常磐のはしにかゝるふぢなみ

藤花をよめる　藤原顯輔朝臣

むらさきの色のゆかりにふぢのはなかゝれる松もむつまじきかな

房の藤の花さかりなりけるを見てよめる　律師増覺

くる人もなきわがやどのふぢの花たれをまつとてさきかゝるらん

紫藤藏松といへることをよめる　良暹法師

松かぜのたゞせざりせばふぢなみを何にかゝれるはなと知らまし

二條關白家にて池邊藤花といへる事をよめる　大納言經信

いけにひつ松のはひ枝にむらさきのなみをりかくる藤さきにけり

百首の歌の中に藤花をよめる　修理大夫顯季

すみのえよしのまつにかゝれる藤のはなかぜのたよりに波やをるらん

（よしロニ及堀河百首ニのえトアリ）

雨中藤花といへる事をよめる　神祇伯顯仲

ぬるゝさへうれしかりけり春雨にいろます藤のしづくこたもへば

隣家藤花といへることをよめる　内大臣家越後

あし垣のほかゝはみれどふぢの花にほひはわれをへだてざりけり

三月盡の心をよめる　大僧都證觀

春のゆくみちにきむかへほゝゝぎすかたらふ聲にたちやとまるゝ

中納言雅定

緒言作者考證ノ條ヲ見ルベシ

のこりなくくれゆく春ををしむこてこゝろをさへに盡しつるかな

寄三月盡戀といへることをよめる　内大臣

春はをし人はこよひとたのむればたもひわづらふけふのくれかな

摂政左大臣家にて人々に三月盡の心をよませ侍ける　源俊頼朝臣

に

かへるはる卯月のいみにさしこめてしばしみあれの程までもみん

重服（ヂユウブク）にて侍ける年三月晦日の日人のもとよりたこづれて侍ければつかはしける　藤原顕輔朝臣

たもひやれめぐりあふべき春だにもたちわかるゝは悲しかりけり

かりけりイロハニヘ及家集ニきものをトアリ

金葉和歌集巻第二

夏歌

卯月のついたちの日ころもがへの心をよめる　源師賢朝臣

われのみぞいそぎたゝれぬ夏ごろもひとへに春ををしむ身なれば

二條關白家にて人々に殘花の心をよませ侍りけるに　藤原盛房

よめる

夏やまのあを葉まじりのたそざくらはつ花よりもめづらしきかな

應徳元年四月三條内裏にて庭樹結葉といへることを

よませ給ひける　院御製

イハニヨリテ人々ノ下ニニチ加フ

むしなべてこずゑあを葉になりぬればまつの緑もわかれざりけり
大納言經信

たまがしは庭も葉びろになりにけりこやゆふしでて神まつるころ
鳥羽殿にて人々歌つかうまつりけるに卯花の心をよめる
春宮大夫公實

ゆきの色をうばひてさけるうの花に小野のさと人ふゆごもりすな
卯花連垣といへる事をよめる
大藏卿匡房

いづれをかわきてをらまし山ざとのかき根つゞきにさけるうの花
卯花をよめる
江侍從

雪とこしもまがひもはてず卯のはなはくるれば月のかげかとも見ゆ
攝政左大臣

うの花のさかぬかき根はなけれども名になながれたるたま川のさと
卯花たがかきねぞといへることをよめる
中納言實行

神やまのふもとにさけるうの花はたがしめゆひしかき根なるらん
卯花をよめる
大納言經信

賤の女があし火たく屋もうの花のさきしかくればやつれざりけり
鳥羽殿の歌合に郭公をよめる
修理大夫顯季

み山いでてまだ里なれぬほとゝぎすたびの空なる音をやなくらん
尋郭公といへることをよめる
藤原節信

けふもまた尋ねくらしつほとゝぎすいかできくべき初音なるらん
郭公の歌十首人々によませ侍りけるついでに
攝政左大臣

ほとゝぎす姿はみづにやどれども聲はうつらぬものにぞありける

たびもとうはトアリ今イロハニホヘトト及家集ニヨリテ改ム

ほと〻ぎすなきつとかたる人づての言の葉さへぞうれしかりける

源雅光

郭公を尋ねける日は聞かで二日ばかりありてなきけ（イハニホヘニヨリテ郭公ノ下ニなを加フ）るをき〻てよめる

橘成元

ほと〻ぎすたとはの山のふもとまでたづねし聲をこよひきくかな

長實卿の家の歌合に郭公の心をよめる

左京大夫經忠

年ごとにきくとはすれどほと〻ぎす聲はふりせぬ物にぞありける

郭公を待心を

内大臣

戀すてふなき名やたゝんほと〻ぎす待つにねぬ夜の數しつもれば（れイニらトアリ）

郭公をよめる

藤原顯輔朝臣

ほと〻ぎすこゝろも空にあくがれてよがれがらなるみ山べのさと（モト顯輔ノ歌ト孝善ノ歌トイリチ）

承暦二年内裏歌合に郭公を人にかはりてよめる

藤原孝善

ほと〻ぎすあかですぎぬる聲によりあとなき空をながめつるかな（ガヒタリ今イロハニホヘトト及顯輔ノ集ニヨリテ改ム）

權僧正永緣

聞くだびにめづらしければほと〻ぎすいつも初音のこゝちこそすれ

人々十首歌讀けるに郭公をよめる

源俊頼朝臣

まちかねて尋ねざりせばほと〻ぎすたれとか山のかひになかまし

郭公驚夢といへる事をよめる

中納言實行公成

驚かす聲なかりせばほと〻ぎすまだうつゝにはきかずやあらまし（公成イハニホヘニ實行トアリ）

待郭公といへることをよませ給へる

院御製

ほと〻ぎすまつにかゝりてあかすかな藤の花こやひとは見るらん（はイハホニのトアリ）

後ノ字ナキ本アリイヅレニテモヨシ
なりイチニらむトアリ

俊忠、卿の家の歌合に郭公をよめる　後、二條關白家、筑前

まつ人のやどをば知らでほとゝぎすをちの山べをなきてすぐなり（らん）

中納言、女王

ほとゝぎすほのめく聲をいづかたとき〻まどはしつあけぼの〻空

郭公をよめる　前、齋院、六條

宿ちかくしばしかたらへほとゝぎすまつ夜の數のつもるしるしに

中納言雅定

ほとゝぎす稀になく夜は山びこのこたふるさへぞうれしかりける

宇治、前、太政大臣、家の歌合に郭公をよめる　康資、王、母

山ちかくうらこぐ舟はほとゝぎすなくわたりこそこまりなりけれ

匡房、卿美作、守にて下りける時、道にて時鳥なきけるを

道ノ上ニイハニホヘニヨリテ時ヲ加フ

き〻てよめる　中原、高眞

き〻もあへずこぎぞわかるゝほとゝぎすわが心なる舟出ならねば

郭公をよめる　藤原、成通、朝臣

ほとゝぎすひと聲なきてあけぬればあやなくよはの恨めしきかな

月、前、郭公といへる事をよめる　皇后宮、式部

ほとゝぎす雲のたえ間にもるつきの影ほのかにもなきわたるかな

曉聞郭公といへる事をよめる　源、定信

わぎもこにあふさか山のほとゝぎすあくればかへる空になくなり

尋郭公といふことをよめる　よみ人しらず

ほとゝぎす尋ぬるだにもあるものをまつ人いかでこゑをきくらん

雨中、郭公といへることをよめる　大納言經信

ほとゝぎすくも路にまどふ聲すなりをやみだにせよさみだれの空

五月五日實能卿のもとに藥玉つかはすとて

あやめ草ねたくもきみがこはぬかなけふは心にかゝれこたもふに　　内大臣

永承六年殿上根合にあやめをよめる　　大納言經信

よろづ代にかはらぬものはさみだれの雫にかをるあやめなりけり

郁芳門院根合にあやめをよめる　　藤原孝善

殿上ノ下モトニテノ字アリ今イロハニホヘニ無キニ從フ

あやめぐさひく手もたゆくながき根のいかで淺香の沼にたひけん

承暦二年内裏歌合にあやめを　　春宮大夫公實

玉江にやけふのあやめをひきつらんみがける宿のつまと見ゆるは

左ヘニハトアリ

宮づかへしけるむすめのもとに五月五日くすだまつかはすとて　　權僧正永緣母

菖蒲草わが身のうきをひきかへてなべてならぬに生ひもいでなん

左イハニホニニトアリ

諸本ニヨリテ歌ノ字ヲ加フ

百首歌中にあやめをよめる　　春宮大夫公實

あやめ草よごのに生ふる物なればねながら人はひくにやあるらん

五月五日家にあやめふくをみてよめる　　左右近府生秦兼久

同じくはこゝのへてふけあやめ草さみだれたらばもりもこそすれ

左イニヘニ右トアリ

むかし中院にすませ給ひける比はみえざりけるあや

めを人の中院のこ申けるを見てよませ給ひける　　三宮親王○輔仁

あさましや見し古さこのあやめ草わがしらぬまに生ひにけるかな

百首歌の中に五月雨をよめる　　參議師頼

さみだれはぬまの岩がきみづこえて眞菰かるべきかたも知られず

はイハニホヘニニトアリ

五月雨の心をよめる　藤原定通

さみだれは日數へにけりあづまやのかやの軒端のしたくつるまで

承暦二年内裏歌合に五月雨の心をよめる　源道時朝臣

にかはりて　大納言經信

さみだれに玉江のみづやまさるらん蘆のした葉のかくれゆくかな

俊忠卿の家の歌合に五月雨の心をよめる　藤原顯仲朝臣

さみだれにみづまさるらしさはだ川まきのつぎ橋うきぬばかりに

五月雨の心をよめる　左兵衛督實能

さみだれはを田のみなぐち手もかけでみづの心にまかせてぞみる

三宮

さみだれにいり江のはしの浮きぬればたろす筏のこゝちこそすれ

（モト承暦云々心ヲよめる源道時朝臣トアリ今經信ノ外ニヨル代ハリ集ニ入メテモヨメルハ眞作者ノ書キタレバナリ）

攝政左大臣家にて夏月の心をよめる　神祇伯顯仲

なつの夜のにはにふりしくしら雪は月のいるこそ消ゆるなりけれ

俊忠卿の家の歌合に水鶏の心をよめる　藤原顯綱朝臣

さゝごゝにたゝく水鶏のたゝすなりこゝろのゝこまる宿やなからん

攝政左大臣の家にて水鶏の心をよめる　源雅光

よもすがらはかなくたゝく水鶏かなさせる戸もなき柴のかり屋を

實行卿の家の歌合に夏風の心をよめる　修理大夫顯季

なつごろもすそ野のくさをふく風にたもひもあへず鹿やなくらん

（俊忠ノ上ニモト權中納言ノ四字アリ今ニハ及ト外ノ例ニハ無キニヨル）

水風晩ニ涼シトいへることをよめる　源俊頼朝臣

風ふけばはすのうき葉にたまこえてすゞしくなりぬひぐらしの聲

ともしの心をよめる　源仲正

さはみづにほぐしの影のうつれるをふたともしとや鹿はみるらん

神祇伯顯仲

のイハニホニかトアリ

鹿たゝぬはやまのすそにともしして幾夜かひなき夜をあかすらん

家の歌合に盧橘花をよめる　中納言俊忠

盧イハニホヘニ花トアリ

さつきやみ花たちばなのありかをば風のつてにぞそらにしりける

百首歌の中に盧橘花をよめる　春宮大夫公實

此盧モハニニ花トアリ

宿ごとにはなたちばなぞにほひけるひと木がすゑを風はふけども

ひけるニホヘニふなるトアリ

二條關白家にて雨後野草夏といへることをよめる　源俊頼朝臣

野草イニ夏草トアリ

このさともゆふ立しけりあさぢふに露のすがらぬくさの葉もなし

實行卿家の歌合に鵜川の心をよめる　中納言雅定

何先後詳考

たほゐがはいくせ鵜舟のすぎぬらんほのかになりぬかゞり火の影

夏月をよめる　源親房

たまくしげふたがみ山の木の間よりいづれはあくるなつの夜の月

六月二十日ごろに秋の節になる日人のもとに遣はしける　攝政左大臣

みなづきのてる日の影はさしながらかぜのみ秋のけしきなるかな

公實卿の家にて對水待月といへるこゝろをよめる　藤原基俊

なつの夜のつきまつほどのてすさびに岩もる清水いくむすびしつ

秋隔一夜といへることをよめる　中納言顯隆

みそぎするみぎはに風のすゞしきはひと夜をこめて秋やきぬらん

金葉和歌集巻第三

秋歌

百首歌の中に秋立こゝろをよめる　春宮大夫公實

ここことはにふくゆふ暮のかぜなれど秋たつ日こそすゞしかりけれ

野草帯露といへることをよめる　太宰大貳長實

まくずはふあだの大野のしらつゆをふきなみだりそ秋のはつかぜ（みだりイロハニはらひトアリ）

後冷泉院御時皇后宮春秋の歌合に七夕のこゝろをよめる　土佐内侍

よろづ代にきみぞ見るべき棚機のゆきあひの空をくものうへにて

七夕の心をよめる　能因法師

たなばたの苔のころもをいとはずは人なみ〳〵にかしもしてまし

七月七日父の服にて侍けるこしよめる　橘元任

藤ごろもいみもやすることたなばたにかさぬにつけてぬるゝ袖かな

七夕の心をよめる　前齋宮河内

こひ〳〵てこよひばかりやたなばたの枕にちりのつもらざるらん

三宮

あまの河わかれにむねのこがるればかへさの舟はかぢもとられず

中納言國信

たなばたにかせるころもの露けさにあかぬけしきを空にしるかな

七夕後朝の心をよめる　内大臣

かぎりありてわかるゝ時もたなばたの涙のいろはかはらざりけり

たなばたのあかぬわかれの涙にやはなのかづらもつゆけかるらん

皇后宮權大夫師時

あまのかはかへさの舟になみかけよのりわづらはゞ程もふばかり

内大臣家越後

かへるさはあさ瀬もしらじあまの河あかぬなみだに水しまさらば

源俊頼朝臣

草花告秋といふ事をよめる　源雅兼朝臣

さきそむるあしたの原の女郎花あきを知らするつまにぞありける

たなじ心をよめる　源緣法師

さきにけりくちなし色のをみなへしいはねどしるし秋のけしきは

秋のはじめのこゝろをよめる　大納言經信

たのづから秋はきにけりやま里のくずはひかゝるまきのふせ屋に

端書イハニ初秋ふしみにて山家に秋來るといへることなよめるトアリ

田家早秋といへることをよめる　右兵衛督伊通

いな葉ふくかぜのたとせぬ宿ならばなにゝつけてか秋をしらまし

山家秋といへることをよめる　藤原行盛

イハニ山家初秋云々トアリ

やまふかみとふ人もなきやどなれどそこもの小田に秋はきにけり

師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて田家秋風といへる事をよめる　大納言經信

ゆふされば門田のいな葉にとづれてあしのまろ屋にあき風ぞふく

三日月の心をよめる　大江公資朝臣

やまの端にあかでいりぬるゆふづく夜いつ有明にならんとすらん

攝政左大臣家にて夕月夜の心をよませ侍けるによめる　藤原忠隆

かぜふけば枝やすからぬ木の間よりほのめく秋のゆふづく夜かな

月旅宿友といへる事をよめる　法橋忠命

くさまくらこのたびねにぞ思ひしるつきよりほかの友なかりけり

閑見月といへる事をよめる　顯仲卿女

もろともにくさ葉のつゆのたきゐずはひとりや見まし秋の夜の月

翫明月といへる事をよめる　前中納言伊房

いつはりになりぞしぬべき月かげをこの見るばかり人にかたらば

鳥羽殿にて旅宿月といへる事をよめる　春宮大夫公實

われこそはあかしのせとに旅寢せめたなじみづにもやどる月かな

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて翫池上月といへることをよませ給ひける　院御製

モト池上翫月トアリ今ニホヘト及中右記ニヨル

いけみづにこよひの月をうつしもてこゝろのまゝにわが物とみる

るイニヘニんトアリ此御製ノ事

クハシク緒言作者考證ノ條ニ云ヘリ、

イハニホトニリテ朝臣ニ位字ノ四ニフニ加ハ添ヘ戸ナレバ例ナル

てる月のいは間のみづにやどらずは玉ゐるかずをいかで知らまし　大納言經信

明月をよめる　民部卿忠教

いづくにもこよひの月をみるひとのこゝろやたなじ空にすむらん

後冷泉院御時皇后宮の歌合に駒迎の心をよめる　藤原隆經朝臣

ひくこまのかずより外にみえつるは關の清水のかげにぞありける

駒迎の心をよめる　源仲正

あづま路をはるかにいづるもち月のこまにこよひやあふ坂のせき

八月十五夜の心をよめる　源親房

さやけさはたもひなしかど月かげをこよひとしらぬ人にとはぐや

閏九月のある年八月十五夜によめる　春宮大夫公實

あきはなほのこりたほかる年なれどこよひの月のなこそをしけれ

水上月といへるこゝろをよめる　前齋院六條

雲のなみかゝらぬさ夜のつきかげをきよたき川にうつしてぞ見る

九月十三夜閑見月といへる事をよめる　源俊頼朝臣

すみのぼるこゝろや空をはらふらん雲のちりゐぬあきの夜のつき

月をよめる　皇后宮肥後

つきを見てたもふ心のまゝならばゆくへも知らずあくがれなまし

人のもとにまかりて物申けるほどに月のいりにけれ

ばよめる　源師俊朝臣

いかにしてしがらみかけむ天のかはながるゝ月やしばしよどむと

此ハシ書イニ水ニ經長卿の桂の山荘にて里人々歌をよみけるによめるトアリ

經長卿の桂の山荘にて閑に月をみるこいへる事をよめる　大納言經信

こよひわがかつらの里のつきを見てたもひ殘せるこゝのなきかな

承暦二年内裏歌合に月をよめる　春宮大夫公實

くもりなき影をこゝめば山の端にいるこもつきををしまざらまし

宇治前太政大臣家の歌合に月をよめる　皇后宮摂津

こほりハトニつらゝトアリ

てるつきのひかりさえゆく宿なればあきの水にもこほりゐにけり　源俊頼朝臣

イハトニなよヨリテめるノ四字チ加フ

山のはにくものころもをぬぎすてゝひこりも月のたちのぼるかな　摂政左大臣

水上月をよめる

あし根はひかつみもしげきぬま水にわりなくやゞるよはの月かな

宇治前太政大臣家の歌合に月をよめる　一宮紀伊

かゞみやまみねよりいづる月なればくもるよもなき影をこそみれ

秋難波のかたにまかりて月のあかゝりければよめる　參議師頼

いにしへのなにはの事をたもひいでて高津の宮につきのすむらん

イハニホニヨリテ朝臣チ加フ

秋月如畫こいへることをよめる　藤原隆經朝臣

草のうへの露なかりせばいかにしてこよひの月をよるこ知らまし

翫明月こいふ事をよめる　源行宗朝臣

なごりなく夜はのあらしに雲はれてこゝろのまゝにすめる月かな

八月十五夜に人々歌よみけるによめる　平師季

みかさ山ひかりをさしていでしよりくもらであけぬ秋のよのつき

宇治、入道前、太政大臣の三十講の歌合に月の心をよめる

よみ人しらず

宿からぞ月のひかりもまさりけるよのくもりなくすめばなりけり

藤原、忠隆

赤染ノ歌ナリ緒言作者考證ノ條チ見ヨ

月をよめる

ながむればふけゆくまゝに雲はれてそらものどかにすめる月かな

奈良の花林院の歌合に月をよめる　權僧正永緣

いかなれば秋はひかりのまさるらんたなじみかさの山のはのつき

月の歌とてよめる　藤原、顯輔、朝臣

イハニホヘニヨリテ朝臣チ加フ

みかさ山もりくるつきのきよければ神のこゝろもすみやしぬらん

太皇大后宮の扇合に月の心をよめる

大納言經信

かすがやま峯よりいづるつきかげはさほの河瀨のこほりなりけり

顯季卿の家にて九月十三夜人々月の歌よみけるに

太宰、大貳長實

モトアリ今イロハニホヘ及家集ニヨルモトみかさトアリ今イホニヨルかすがやま

くもりなきかゞみと見ゆるつきかげに心うつらぬひとはあらじな

源、俊頼、朝臣

くもりもトアリ今イホニヨルくまもトアリ今イハニホトニヨルくもりなきかゞみと

むらくもや月のくまをばのごふらん晴行くたびにてりまさるかな

月の心をよめる　藤原、家經、朝臣

いまよりはこゝろゆるさじ月かげのゆくへもしらず人さそひけり

月照二古橋一といへることをよませ給へる

三、宮

こだえして人もかよはぬたな橋はつきばかりこそすみわたりけれ

水上、月をよめる　藤原、實光、朝臣

つきかげのさすにまかせてゆく舟はあかしの浦やこまりなるらん

題しらず　太宰大貳長實

さらぬだに玉にまがひてたくつゆをいとゞみがける秋のよのつき

永承四年殿上歌合に月の心をよめる　藤原家經朝臣

よどこともにくもらぬ雲のうへなればたもふことなく月をみるかな

月前旅宿といへることをよめる　修理大夫顯季

くモトきトアリ今イロハニホヘトチニヨル

まつが根にころもかたしきよもすがら眺むるつきを妹みるらんか

獨月をながめてよめる　藤原有教母

ながむればたぼえぬ事もなかりけり月やむかしのかたみなるらん

行路暁月といへることをよめる　權僧正永緣

もろともにいづこはなしにありあけの月のみたくる山路をぞゆく

對山待月といへる事をよめる　土御門右大臣師房源

ありあけの月まつほどのうたゝねは山のはのみぞゆめに見えける

山家暁月といへる事をよめる　中納言顯隆

やまざとのかど田の稲のほの〳〵とあくるもしらず月をみるかな

月のあかゝりけるころ明石にまかりて月を見てのぼりたりけるに都の人々月はいかにと尋ねければよめる　平忠盛朝臣

にハニホトニかトアリ

ありあけの月もあかしのうらかぜに波ばかりこそよるとみえしか

月前落葉といへる事をよめる　源俊頼朝臣

あらしをや葉もりの神もたゝるらむつきに紅葉のたむけしつれば

蟲をよめる　前齋院六條

しつれはモトしてけりトアリ今イニホヘ及散水集ニヨル

蕃イハニヘニ虫トアリ

つゆしげき野邊にならひてきり〳〵すわが手枕のしたになくなり

はたたりといへる虫をよめる　顯仲卿女

さゝがにのいとひきかくる草むらにはたたる虫のこゑぞきこゆる（きこゆなり）

雁をよめる　よみ人しらず

玉づさはかけてきつれどかりがねのうはの空にもきこゆなるかな

歌合に雁を題ロトイフニホヘニナシ　春宮大夫公實

いもせやま峰のあらしやさむからんころもがりがね空になくなり

鹿をよめる　三宮大進

つまこふる鹿ぞなくなるひとり寐のここのやま風みにやしむらん

曉聞鹿といへることをよめる　皇后宮右衛門佐

たもふことあり明がたのつきかげにあはれをそふるさをしかの聲

夜聞鹿聲といふことをよめる　內大臣家越後

よはになくこゑに心ぞあくがるゝわが身はしかのつまならねども

ぞきこゆるイハニホヘトニきこゆなりトアリ

攝政左大臣家にて旅宿鹿といへる事をよめる　源雅光

さもこそはみやここひしき旅ならめしかの音にさへぬるゝ袖かな

鹿の歌とてよめる　藤原顯仲朝臣

世のなかをあきはてぬこやさをしかの今はあらしの山になくらん

野花帶露といへる事をよめる　皇后宮肥後

しらつゆと人はいへども野べみればたゞ花ごとにいろぞかはれる

太皇大后宮扇合に人にかはりて萩の心をよめる　僧正行尊

こはぎ原にほふさかりはしら露もいろ〳〵にこそみえわたりけれ

萩をよめる　太宰大貳長實

しらすげの眞野のはぎはら露ながらをりつる袖ぞひとなとがめそ

女郎花をよめる　　隆源法師

をみなべしさける野べにぞやどりぬる花の名立になりやしぬらん

顯隆卿の家の歌合にをみなべしをよめる　　中納言俊忠

ゆふ露のたまかづらしてをみなべし野はらの風にをれやふすらん

女郎花をよめる　　藤原顯輔朝臣

しら露やこゝろたくらんをみなべし色めく野べにひこかよふこて

（此ハシ書イハニホヘニヨル）

攝政左大臣

をみなべし夜のまの風にをれふしてけさしら露（も）にこゝろたかるな

（しらイハニヘニしもトアリ）

攝政左大臣家にて歌合し侍けるに蘭をよめる　　源忠季

さほ川のみぎはにさけるふぢ袴なみのよりてやかけんこすらん

藤袴をよめる　　右兵衛督伊通

かりにくる人もきよとやふぢばかま秋の野ごとにしかのたつらん

さゝがにのいとのこぢめやあだならん綻びわたるふぢばかまかな　　神祇伯顯仲

鳥羽殿の前栽合（センザイアハセ）にをみなべしの心をよめる　　春宮大夫公實

あだし野のつゆふきみだる秋風になびきもあへぬをみなべしかな

野花留人といへることをよめる　　平忠盛朝臣

ゆく人をまねくか野邊のはなすゝきこよひもこゝに旅寐せよとや

堀河院御時御前にてたの〳〵題をさぐりて歌つかうまつりけるに薄をこりてつかうまつれる　　源俊頼朝臣

うづらなく真野のいり江のはま風にをばななみよる秋のゆふぐれ
河霧をよめる　藤原基光

宇治がはのかは瀬もみえぬゆふ霧にまきのしま人ふねよばふなり
郁芳門院歌合に菊をよめる　中納言通俊

さかりなるまがきの菊をけさみればまだそらさえぬ雪ぞつもれる
鳥羽殿の前栽合に菊をよめる　修理大夫顯季

ちこせまできみがつむべき菊なれば露もあだにはわかじこぞ思ふ
攝政左大臣家にて紅葉隔垣といへることをよめる　藤原仲實朝臣

もずのゐるはじのたち枝の薄もみぢたれわが宿のものと見るらん
承暦二年内裏歌合に紅葉をよめる　源師賢朝臣

はゝき木のこずゑやいづこねばつかな皆そのはらは紅葉しにけり

モト隣家紅葉トアリ今イハニホヘトニヨル

宇治前太政大臣大井河にまかりたりけるともにまかりて水邊紅葉といへる事をよめる　大納言經信

たほゐがは岩波たかしいかだしよきしのもみぢにあからめなせそ
太皇大后宮の扇合に人にかはりて紅葉の心をよめる　源俊頼朝臣

たとは山もみぢちるらしあふさかの關のをがはにしきたりかく
落葉をよめる　藤原伊家

たに川にしがらみかけよたつ田ひめみねの紅葉にあらしふくなり
大井河の行幸につかうまつれる　修理大夫顯季

たほゐ河ゐせきのたとのなかりせば紅葉をしけるわたりとや見ん
深山紅葉といへる事をよめる　大納言經信

山もりよをのの音たかくひびくなり峰のもみぢはよきてきらせよ

紅葉をよめる

よそに見るみねの紅葉やちりくるこふもこの里はあらしをぞまつ

神祇伯顯仲

大井河の逍遙に水上落葉こいへる事をよめる

藤原伊家

はゝそちるいは間をくぐる鴨ごりはたのが青ばももみぢしにけゞ

二句ホニ岩間ニかづくイニハヘトニハ岩間をかづくトアリ

落葉埋橋こいへる事をよめる

修理大夫顯季

小ぐら山みねのあらしのふくからに谷のかけはしもみぢしにけり

落葉藏水こいへる心をよめる

大中臣公長朝臣

たほゐがはちるもみぢ葉にうづもれてこなせの瀧は音のみぞする

落葉隨風こいへる事をよめる

太宰大貳長實母

いろふかきみ山がくれのもみぢ葉をあらしの風のたよりにぞ見る

九月盡の心をよめる

中原經則

あすよりはよもの山邊のあきぎりのたゝんこすらん

俊頼イニホヘト及續詞花集ニハ師俊トアレド散木集ニ出デタルヲ見ルニ俊頼ノ歌ニヤ

源師俊朝臣

くさの葉にはかなくきゆる露をしもかたみにたきて秋のゆくらん

九月盡の日大井河にまかりてよめる

春宮大夫公實

をしめごもよもの紅葉はちりはてゝこなせぞ秋のこまりなりける

大井ノ下ニイロハホニヨリテ河ヲチカフ

金葉和歌集巻第四

冬歌

承暦二年御前にて殿上のをのこども題をさぐりて歌

つかうまつりけるに時雨をとりてつかうまつれる　源師賢朝臣

（ニホニヨリテつかうまつれるヲ加フ）

神無月しぐるゝまゝにくらぶ（をぐら）やましたてるばかりもみぢしにけり

（くらぶニホニをぐらトアリ）

従二位藤原親子家の草子合に時雨をよめる　修理大夫顯季

しぐれつゝかつちるやまのもみぢ葉をいかにふくよの嵐なるらむ

ならにて人々百首歌讀けるに時雨をよめる

やまかはの水はまさらでしぐれには紅葉のいろぞふかくなりける　　權僧正永緣

時雨をよめる　　攝政家、三河

かみな月しぐれの雨のふるまゝにいろ〳〵になるすぐかやまかな

後朱雀院、御時御前にて霧藏紅葉こいへる事をよめる　　前、中納言資仲

もみぢちる山はあきぎりはれせねば立田のかはのながれをぞ見る

大井河にまかりて落葉の心をよめる　　源平、致親

イハニホヘニ平ロチニ源トアリ

たほゐがはもみぢをわくるいかだしはさをに錦をかけてこそ見れ

落葉をよめる　　大納言經信

みむろ山もみぢちるらしたび人のすげの小がさにしきたりかく

竹風似雨こいへるこゝろをよめる　　前、中納言基長

なよたけのたもとにも袖をかづきつゝぬれぬにこそは風こしりぬれ

十月十日ごろに鹿のなきけるをきゝてよめる　　法印光清

なにごとにあきはてながらさを鹿のたもひかへして妻をこふらん

百首、歌の中に紅葉をよめる　　源、俊頼、朝臣

たつたがはしがらみかけて神なびのみむろの山のもみぢをぞ見る

百首、歌中にあじろをよめる　　皇后、宮、肥後

氷魚のよるかは瀨にみゆる網代木はたつ白波のうつにやあるらん

月照網代こいへることをよめる　　大納言經信

月きよみせゞのあじろによるひをは玉藻にさゆるこほりなりけり

旅宿、冬、夜こいへる事をよめる

イロハニホヘトニゼトシツルトセリ

此歌ノ事緒言作者考證ノ條ヲ見ルベシ

トニヨリテ百首歌中ニノ五字ヲ加フ

旅寐するよごこさえつゝあけぬらしごかたぞ鐘のこゑきこゆなり

關路千鳥といへる事をよめる　源兼昌

あはぢしまかよふちどりのなく聲にいくよねざめぬ須磨のせき守

氷をよめる　藤原隆經朝臣

たか瀬ぶねさをの音にぞしられぬる蘆間のこほりひとへしにけり

谷水結氷といへる事をよめる　内大臣

たに川のよどみにむすぶこほりこそみる人もなきかゞみなりけれ

百首歌中に氷をよめる　藤原仲實朝臣

しながどりゐなのふしはら風さえてこやの池みづこほりしにけり

冬月をよめる　神祇伯顯仲

ふゆさむみ空にこほれるつきかげは宿にもるこそくるなりけれ

氷滿池上といへる事をよめる　大納言經信

みづどりのつらゝの枕ひまもなしうべさえけらしこふのすがごも

深山霰をよめる　大藏卿匡房

はしだかのしらふに色やまがふらんこがへる山にあられふるなり

水邊寒草といへる事をよめる　大中臣公長朝臣

たかねにはゆきふりぬらしましば川きしのかげ草たるひすがれり

宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる　源頼綱朝臣

ころも手によごのうら風さえ〳〵てこだかみ山にゆきふりにけり

橋上初雪といへる事をよめる　前齋院尾張

しら浪のたちわたるかと見ゆるかなはま名のはしにふれるはつ雪

初雪をよめる　大納言經信

はつ雪はまきの葉しろく降りにけりこや小野やまの冬のさびしさ

ぬイハニホヘニけトアリ

きしニヘニほきトアリ

すがれリモトしにけりトアリ今イロハニホヘニヨル

にホニはトアリ

雪中、鷹狩のこゝろをよめる　源、道濟

ぬれ〳〵もなほかりゆかんはし鷹のうは毛のゆきをうち拂ひつゝ

鷹狩の心をよめる　源、俊頼、朝臣

はしだかをこりかふ澤にかげみれば我身もともにこやがへりけり（せ）

（けりイハニ水ヘトニせリトアリ）

内大臣家、越後

ことわりやかた野の小野になく雉子さこそはかりの人はつらけれ

百首、歌、中に雪の心をよめる　大藏卿匡房

いかにせんするゑのまつ山なみこさばみねのはつ雪きえもこそすれ

宇治、前、太政大臣、家、歌合に雪の心をよめる　皇后宮、攝津

ふる雪にすぎのあを葉もうづもれてしるしも見えず三輪の山もと

中納言、女王

いはしろのむすべる松にふるゆきは春もとけずやあらんとすらん

大嘗會、主基方備中、國彌高山をよめる　藤原、行盛

ゆきふればいやたか山のこずゑにはまだ冬ながらはなさきにけり

雪の歌とてよめる　源、俊頼、朝臣

ころも手のさえゆくまゝにしもとゆふかづらき山に雪はふりつゝ

雪の御幸に遲く參ければしきりに遲きよしの御使給　六條、右大臣（源顯房）

はりてつかうまつれる

朝ごとのかゞみのかげに面なれてゆきみにこしもいそがれぬかな

（イハニヘトニヨリテのチカフ）

（にモトむトアリ今イハニホヘトニヨル）

炭竈をよめる　皇后宮、權、大夫師時

すみがまにたつけぶりさへ小野山はゆきげの雲とみゆるなりけり

（はモトにトアリ今イハニホヘトチニヨル）

百首、歌の中に雪をよめる　隆源法師

みやこだに雪ふりぬればしがらきのまきの杣やまあとたえぬらん

皇后宮、肥後

みちもなくつもれる雪にあとたえてふる里いかにさびしかるらん

選子内親王いつきにたはしましける時雪ふりたるに

月のあかゝりける夜まゐりたりけれど女房たちねたりけるにや月も見ざりければ殿上の御簾にむすびつけゝる歌

藤原、兼房、朝臣

かきくらしあめふるよはやいかならん月と雪とはかひなかりけり

家經朝臣が桂の山荘のさうじの𤲞に神樂したるかたかける所をよめる

康資、王、母

さかき葉やたちまふ袖のたひ風になびかぬ神はあらじとぞたもふ

皇后宮、權、大夫師時

神樂をよめる

神がきのみむろのやまに霜ふればゆふしでかけぬさかき葉ぞなき

三、宮

氷をよませ給へる

つながねどながれもやらずたか瀬ぶねむすぶ氷のこけぬかぎりは

前、齋院、六條

水鳥をよめる

なか〳〵に霜のうはぎを重ねてやをしの毛ごろもさえまさるらん

前、齋宮、內侍

池、水氷、水鳥をよめる

なみまくらいかにうきねを定むらんこほるます田のいけのをし鳥

修理、大夫顯季

題しらず

さむしろにたもひこそやれ笹の葉のさやぐ霜夜のをしのひとり寐

內大臣

依、花待、春といふ心を

なにごとなく年のくるゝはをしけれど花のゆかりにはるをまつかな

藤原成通朝臣

年の暮の心をよめる

ひと知れずくれゆく年ををしむまに春いとふ名のたちぬべきかな

各モト冬のトアリ今イハニホニヨルル

霜月十日比に攝政左大臣家にて各題ごもをさぐりてよみ侍けるにとしの暮をとりてよめる　藤原永實

かぞふるに殘りすくなき身にしあればせめてもをしき年の暮かな

この歌よみて後とし内に身まかりけるとぞ

ろノ字モトノママ

としの暮の心をよませ給ひける　三宮

いかにせんくれゆく年をしるべにて身を尋ねつゝたいは來にけり

イハヘトニヨリテ題ヲ補フ

中原長國

年くれぬとばかりこそはきかましかわが身のうへに積らざりせば

なに事をまつとはなしにあけくれて今年もけふになりにけるかな

中納言國信

金葉和歌集卷第五

賀歌

長治二年三月五日内裏にて竹不改色といへることを

よませ給うける　堀河院御製

とこしなへにふれどもがはりせぬかは竹は流れての世のためしなりけり

とシモトよトアリ今トニヨル

郁芳門院根合に祝の心をよめる　六條右大臣

よろづ代はまかせたるべしいは清水ながきながれを君によそへて

堀河院御時中宮はじめて堀河院にわたりたはします

時に松契遐年といへる事をよめる　大納言俊實

水のたもに松のしづえのひちぬれば千年はいけのこゝろなりけり

此ハシ書諸本皆相異ナリモト遷御リモトアリの時トアリ今ホニヨルモトノママニテハ語格サヘトノママルハザレトナノリ

禁中ニテ翫花こいへる心をよめる　中納言實行

こゝの重にひさしくにほへハ重櫻のごけきはるのかぜと知らずや

花契遐年といへる事をよめる　源師俊朝臣

よろづ代とさしてもいはじさくら花かざさむ春のかぎりなければ

（ロニホシトアリ）

橘俊綱朝臣家歌合に祝の心をよめる　藤原國行

たのづからわが身さへこそ祝はるれ君が千世にもあはまほしさに

百首歌の中に祝の心をよめる　源俊頼朝臣

きみが代はまつのうは葉にたく露のつもりてよもの海となるまで

祝の心をよめる　大納言經信

きみが代のほどをば知らですみよしの松をひさしと思ひけるかな

後一條院御時弘徽殿女御歌合に祝の心をよめる

きみが代はするゑのまつ山はるゞゝとこすしら浪のかずもしられず

（モトト花ざくらトアリ今イハホヘニヨル）

嘉承二年三月鳥羽殿の行幸に池上花こいへる事をよ

ませ給ひける　堀河院御製

いけ水のそこさへにほふさくら花みるともあかじ千世のはるまで

（參ノ下モト入ノ字アリ今イロハニホヘトチニ無キニヨル）

大嘗會主基方辰日參音聲に鼓山をよめる　藤原行盛

たゝ高きつゞみの山のうちはへてたのしき御代となるぞうれしき

悠紀方の朝日の里をよめる　藤原敦光朝臣

くもりなき豊のあかりにあふみなる朝日のさとはひかりさしそふ

巳日の樂の破に雄琴の里をよめる

まつかぜの雄琴のさとにかよふにぞをさまれる世の聲はきこゆる

永成法師

後冷泉院の御時の大嘗會の主基方備中、國二萬、郷をよめる　藤原、家經、朝臣

みつぎ物はこぶよぼろをかぞふればにまの里びとかずそひにけり

同國いな井のさとを人にかはりてよめる　高階、明賴

なはしろの水はいな井にまかせたり民やすげなるきみが御代かな

祝の心をよめる　皇后宮、肥後

いつとなくかぜふく空にたつちりのかずもしられぬ君がみよかな

花ニ契ニ遐年一といへる事をよめる　太宰、大貳長實

はなもみな君がちとせをまつなればいづれの春かいろもかはらん

攝政左大臣中將にて侍けるころ春日、祭の使にてくだりけるに周防、内侍も女使にてくだりけるに爲隆卿行事、辨にて侍りけるがもとに遣しける　周防、内侍

トニヨリテ　テチ加ヘイ　ハニヨリテ　モチ加フ

いかばかり神もうれしとみかさ山ふた葉のまつの千代のけしきを　藤原、道經

うれしイロ　ホヘトチニ　あはれトアリ

題しらず

君が代はいくよろづ代かかさぬべきいつぬき川のつるの毛ごろも　宇治、前、太政大臣、家の歌合に祝の心をよめる　中納言通俊

君が代はあまの児屋根のみことよりいはひそめし久しかれとは　大藏卿匡房

のモトツト　アリ今ハニ　ホヘトニヨ　リテ改ム

君が代はくもりもあらじみかさやまみねに朝日のさゝむかぎりは　新院の北面にて藤花久句こいへる事をよめる　大夫、典侍

久句ヘトニ　懸松トアリ

ふぢなみはきみが千年をまつにこそかけて久しくみるべかりけれ

祝の心をよめる　源忠季

きみが代はとみのを川のみづすみて千年をふともたえじとぞ思ふ

實行卿の家の歌合に祝の心をよめる　藤原爲忠

みづがきの久しかるべききみが代をあまてる神やそらにしるらん

前中宮はじめて内へまゐらせ給ひける夜雪のふりて侍ければ六條右大臣のもとへつかはしける　宇治前太政大臣（藤原頼通）

ゆきつもる年のしるしにいとどしくちとせの松のはなさくぞみる

かへし　六條右大臣

つもるべしゆきつもるべし君が代はまつのはなさく千度みるまで

天喜四年皇后宮の歌合に祝の心をよませ給うける　後冷泉院御製

ながはまの真砂のかずも何ならずつきせず見ゆるきみが御代かな

松上雪をよめる　源頼家朝臣

よろづ代のためしと見ゆる松の上にゆきさへつもる年にもある哉

前齋宮伊勢にたはしましける比いしなごりの石合といへる事をせさせ給ひけるに祝の心をよめる　源俊頼朝臣

（石モト歌ト　アリ今イロ　ハニホヘチ　ニヨル）

くもりなく豐さかのぼるあさ日には君ぞつかへんよろづ代までに

金葉和歌集巻第六

別離ノ歌

兼房ノ朝臣丹後守にて下りけるにつかはしける　大納言經長

君うしやはなのみやこのはなを見でなはしろ水にいそぐこゝろよ（よハホヘニハトアリ）

かへし　藤原ノ兼房ノ朝臣

よそにきく苗代みづにあはれわがたりたつ名をもながしつるかな

重尹（シゲマサ）帥に成て下り侍るに人々馬のはなむけし侍ける　堀河ノ右大臣

時よめる

かへるべきたびのわかれとなぐさむる心にたがふなみだなりけり

題しらず　　よみ人しらず

たくれゐてわがこひをれば白くものたなびく山をけふやこゆらん

經輔卿筑紫へ下り侍けるにぐして下りけるに道より

上東門院に侍ける人に遣はしける　　前太宰大貳長房

かたしきのそでにひとりはあかせどもたつる涙ぞよをかさねぬる

是を御覽じてかたはらに書付させ給ひける　　上東門院（一條院中宮彰子）

わかれ路をげにいかばかり歎くらんきく人さへぞそでにぬれける

源公定が大隅守になりてくだりける時月あかゝりける夜別をしみて讀る　　源爲成

はるかなるたびの空にもたくれねばうらやましきは秋のよのつき

對馬守にて小槻のあきみちが下りける時つかはしける

（モト名ノ下ニ朝臣トアリ今イニホヘトニ無キニ從フ）（ヌロハニホヘトニけトアリ）（此歌ノ事緒言作者考證ノ條ニ云ヘリ）

る

たきつしま雲ゐのきしをゆきかへりふみ通はさむまぼろしもがな

俊頼朝臣がいせへまかることありて下りけるとき人

人馬のはなむけし侍ける時よめる　　參議師頼

伊勢の海をのゝふるえにくちはてで都のかたへかへれとぞたもふ

源行宗朝臣

まちつけむわが身なりせばかへるべき程をいくたび君にとはまし

百首歌の中に別の心をよめる　　中納言國信

今日はさはたち別るともたよりあらばありやなしやの情わするな

藤原基俊

秋ぎりのたちわかれぬる君によりはれぬたもひにまごひぬるかな

橘爲仲朝臣みちのくにゝくだりけるに人々うまのはなむけ

（共政モト爲政トアリ今ロチ及拾遺集ニヨル）（俊頼朝臣モトとしよりトアリ今イニホヘニヨル）（イニホトニ海ノ下ニノ字アリ）

なむけし侍けるによめる　藤原實綱朝臣

人はいさわが世はすゑになりぬれば又あふさかもいかゞまつべき

世モト身トアリ今諸本ニヨルホニ又あふ阪なしかゞたのまむトアリ

藤原有定

こひしさはそのひとかずにあらずとも都をしのぶうちにいれなん

經平卿つくしへまかりけるにぐしてまかりける時公實卿のもとへつかはしける　中納言通俊

さしのぼる朝日にきみを思ひいでむかたぶく月にわれをわするな

イハニホニヨリテ卿チ補フ

返し　春宮大夫公實

あさ日とも月ともわかずつかの間もきみを忘るゝときしなければ

みちのくにへまかりける時あふさかのせきよりみやこへつかはしける　橘則光朝臣

われひとりいそぐと思ひしあづま路に垣根の梅はさきだちにけり

時モトニトアリ今イハニホヘトニヨル

金葉和歌集卷第七

戀歌上

五月五日はじめたる女のもとにつかはしける　小一條院御製

たるイハニヘトニテトアリ

しらざりき袖のみぬれてあやめ草かゝるこひぢにたひんものとは

イロニホヘニ御製ノ二字ナシ

女のもとにつかはしける　大江公資朝臣

きニホヘトニつトアリ

しのすゝき上葉にすがくさゝがにのいかさまにせば人なびきなん

曉の戀を讀る　神祇伯顯仲

此歌ノ事緒言作者考證ノ條ヲ見ヨ

さりともと思ふかぎりはしのばれて鳥どもにぞねはなかれける

つれなかりける女のもとにつかはしける

これにしくれもひはなきをくさ枕たびにかへすはいなむしろこや

春宮大夫公實

顯季卿の家にて人々戀の歌よみけるによめる

藤原顯輔朝臣

あふこと見てうつゝのかひはなけれごもはかなきゆめぞ命なりける

女のもとにつかはしける

源雅光

あふまでは思ひもよらずなつ引のいとほしこだにいふときかばや

双ハニホニハ草ヘニハ造トアリ

従二位藤原親子家の雙草紙合に戀の心をよめる

宣源法師

今はたゞねられぬいをぞ友とするこひしき人のゆかりとれもへば

太宰大貳長實

のイハニホトニはトアリ

思ひやれ須磨のうらみてねたる夜のかたしく袖にかゝるなみだを

物いひける女のかみをかきこして見けるをみてよめる

津守國基

イニホヘニヨリテみてノニ字ヲ加フ

あさねがみたが手枕にたわつけてけさはかたみにふりこしてみる

題しらず

よみ人しらず

にイロハニホヘニトアリ

こひすてふ名をだにながせなみだ河つれなきひごもきゝや渡るこ

なにせんにれもひかけゝんから衣こひするこゝはみさをならぬに

するモトしきトアリ今イハニホヘトニヨル

中納言雅定

あふこゝはいつこなぎさの濱千鳥なみのたちゐにねをのみぞなく

ある宮ばらに侍ける人の忍びて宮をいでてあやしの

小家にてもの申て又の日つかはしける

春宮大夫公實

思ひいづやありしそのよの呉竹はあさましかりしふしごころかな

モトあやしかりけるトアリ今イロハニホヘトチニヨル

顯季卿家にて寄織女戀といふ心をよめる　少將公教母

たなばたはまたこん秋もたのむらん逢夜もしらぬ身をいかにせん

寄水鳥戀といへることをよめる　源師俊朝臣

みづとりの羽かぜにさわぐさゞ浪のあやしきまでもぬるゝ袖かな

もハニヘニにトアリ

寄夢戀といへる事をよめる　左兵衛督實能

ゆめにだにあふことは見えよさもこそはうつゝにつらき心なりとも

題しらず　中納言顯隆

しらくものかゝる山路をふみみてぞいとゞこゝろは空になりける

中納言俊忠卿の家にてたのめてあはぬ戀といへる心をよめる　源顯國朝臣

逢ひみんとたのむればこそくれはとりあやしやいかゞ立歸るべき

忍ブル戀の心をよめる　中納言實行

谷がはのうへは木の葉にうづもれてしたにながるゝ人しるらめや

月前戀といへる事をよめる　藤原基光

ながむればこひしき人のこひしきにくもらばくもれ秋のよのつき

題しらず　よみ人しらず

つらしともたろかなるにぞいはれけるいかに恨むゝ人にしらせん

もの申ける人の前中宮にまゐりにければなごりをこひて月のあかゝりける夜いひつかはしける　藤原知房朝臣

たも影はかずならぬ身にこひられてくもゐの月をたれとみるらん

さはる事ありて久しう音づれざりける女のもとより　よみ人しらず

いひたくり侍りける

あさましやなどかきたゆる藻鹽草さこそはあまのすさびなりこも

文ばかりたこせていひたえにける人のもとにいひつ

かはしける　　内大臣家小大進

ふみそめて思ひかへりしくれなゐの筆のすさびをいかで見せけん

實行卿家の歌合に戀の心をよめる　長實卿母

しるらめやよごのつぎ橋よとともにつれなき人をこひわたるとは

藤原道經

こひわびてたさふる袖やながれいづる涙のかはのゐせきなるらん

少將公教母

ながれての名にぞたちぬる涙がはひとめつゝみのせきしあへねば

題しらず　　皇后宮右衞門佐

なみだがは袖のゐせきもくちはてゝ淀むかたなきこひもするかな

のモトタルトアリ今イニヘニヨル

かくとだにまだいはしろのむすびまつむすぼほれたるわが心かな

女のもとにつかはしける　　藤原顯輔朝臣

こひすてふもじの關守いくたびかわれかきつらんこゝろづくしに

家集ニシトアリ

左兵衞督實能

いのちだにはかなからずは年ふともあひみん事をまたましものを

後朝の心をよめる　　源行宗朝臣

つらかりし心ならひにあひ見てもなほゆめかとぞうたがはれける

堀河院御時の艷書合によめる　　春宮大夫公實

たもひあまりいかでもらさん奥やまのいはがきこむる谷のした水

戀の心をよめる　　藤原顯輔朝臣

こしふれど人もすさめぬわがこひやくち木のそまの谷のうもれぎ

なモトもトアリ今イロハニホヘチニヨル

後朝の心をよめるモトノママ

源顯國朝臣

あるまじき人をたもひかけてよめる

よみ人しらず

いかにせん數ならぬ身にしたがはでつゝむ袖よりたつるなみだを

院の熊野にまゐらせたはしましける時御迎にまゐり

て旅の床の露けかりければよめる　太宰大貳長實

夜もすがら草のまくらにたくつゆはふる里こふるなみだなるらん

（はニホニやトアリ　なるらんイロハヘチニなりけりトアリ）

野分したりけるにいかゞなど音づれたりける人の其

後又音もせざりければ遣しける　さがみ

荒かりしかぜの後よりたえぬるはくもでにすがく糸にやあるらん

國信卿の家の歌合に夜戀の心をよめる　源俊頼朝臣

よどともにたまちる床のすがまくらみせばや人によはのけしきを

五月五日わりなくてもりいでたる所にこもこいふも

のをひきたりしもわすれがたさにいひつかはしける　さがみ

（いでたるモトいづるトアリ今イロハニホヘトチニヨル）

あやめにもあらぬ菰をひきかけしかりのよどのゝ忘られぬかな

閑五月侍けるこし人をかたらひけるに後の五月すぎ

てなご申ければよめる　橘季通

なぞもかくこひぢにたちて菖蒲草あまりながびくさつきなるらん

人のもとにつかはしける　神祇伯顯仲

たのづから夜がるゝほどこのさむしろは涙のうきになるこしらずや

（とこイロハヘトチニほどトアリ）

そらごといひて久しくたゝせぬ人のもとにいひつか

はしける　さがみ

ありふるもうき世なりけりながからぬひとの心をいのちこもがな

人をうらみてつかはしける　藤原惟規

池にすむわが名ををしのこりかへす物にもがなやひこをうらみじ

女のもとにまかりたりけるに今夜はかへりねと申ければ歸りにけるのちひこ日はいかに思ひしなど申け　藤原正家朝臣

日ロニホヘトニ夜トアリ

いかにイハニホヘニいかがトアリ

れば遣しける　藤原有教母

あきかぜにふきかへされて葛の葉のいかにうらみし物とかはしる

かたらひ侍ける人のあながちに申さする事のありければいひつかはしける　藤原有教母

したがへば身をばすてゝん心にもかなはでこまる名こそをしけれ

イハニしたがはばみをもすてなんトアリ

長實卿家の歌合に戀の心をよめる　藤原忠隆

つゝめどもなみだの雨のしるければ戀する名をもふらしつるかな

人をうらみてつかはしける　藤原惟規

しま風にしばたつなみのやちかへり恨みてもなほたのまるゝかな

なき名たてける人のもとにつかはしける　前齋宮内侍

やモトたトアリ今イハニホヘニヨルハ千返ノ意ナリ

あさましやあふ瀬もしらぬ名取川まだきにいはまもらすべしやは

逢不遇戀といへる事をよめる　左京大夫經忠

ひとよとはいつか契りしかはたけの流れてとこそたもひそめしか

俊忠卿の家にて戀歌十首人々によませ侍けるにちかひてあはずといへる事をよめる　皇后宮式部

あひみての後つらからばよゝをへてこれよりまさる戀にまゝはん

實行卿の家の歌合に戀の心をよめる　源俊頼朝臣

いつとなくこひにこがるゝわが身よりたつやあさまの煙なるらん

戀の歌とてよめる　藤原成通朝臣

のちの世と契りし人もなきものをしなばやとのみいふぞはかなき

攝政左大臣

人ロチニ君トアリ

いはぬまは下はふあしの根をしげみひまなきこひを人しるらめや

かたらひける人のかれ〴〵になりてうらめしかりける

るにつかはしける　白河女御越中

すぐしハ及長明無名抄ニあられトアリ

まちし夜のふけしを何になげきけん思ひたえてもすぐしあられける身を

戀の心を人々よみけるによめる　律師實源

命をしかけてちぎりしなかなればたゆるはしぬるこゝちこそすれ

かきたえてほどもへぬるをさゝがにのいまは心にかゝらずもがな

皇后宮美濃

旅宿戀を　攝政左大臣

みせばやなきみしのびねの草まくらたまぬきかくる旅のけしきを

堀河院御時艶書合によめる　皇后宮肥後

日ヲイヘ及艶書合ニほどトアリ

思ひやれことはで日をふるさみだれにひとりやどもる袖のしづくを

皇后宮にて人々戀の歌つかうまつりけるに被返書戀　美濃

にモトのトアリ今イロハホヘチ及艶書合ニヨル

こいへることを

こふれどもひとの心のとけぬにはむすばれながらかへるたまづさ

人々に戀の歌よませ侍けるに人にかはりて　攝政左大臣

こゝろざしあさぢがすゑにたく露のたまさかにとふ人はたのまじ

寄三日月戀をよめる　藤原爲忠

よひの間にほのかにひとをみか月のあかでいりにし影ぞこひしき

忍戀をよめる　よみ人しらず

のモトハアリ今イロハニホヘチニヨル

忍ぶれどかひもなきさのあまをぶね浪のかけてもいまはうらみじ

うらみじイハニたのまじトアリ

雲居寺の歌合に人にかはりて戀の心をよめる　三宮大進

なぞもかく身にかふばかり思ふらんあひ見ん事もひごのためかは

ホニヨリテの心なヲ補フ

寄花戀の心を　攝政左大臣

あだなりし人のこゝろにくらぶれは花もときはのものごこそみれ

百首歌中に戀の心をよめる　修理大夫顯季

さモトらトアリ今イロハニホヘ及堀河百首ニヨル

わがこひはからす羽にかくことの葉のうつさぬ程はしる人もなし

攝政左大臣家にて戀の心をよめる　源雅光

あやにくにこがるゝ胸もあるものをいかに乾かぬたもとなるらん

寄山戀といへる事をよめる　大中臣公長朝臣

こひわびて思ひいるさの山のはにいづるつき日のつもりぬるかな

イハニホニのもとノ三字ナシ

つれなかりける人のもとにあふよしの夢を見て遣し　藤原公教

けるうたゝねにあふと見つるはうつゝにてつらきを夢と思はましかば

モト俊忠ノ上ニ攝中納言トアリ今イハニホヘニ無キニヨル又題ハモト米不留戀トアリ今ヘトナシ例ノ外トヨル

俊忠卿家にて戀歌十首人々よみけるにくれごもごまらずといへる事をよめる　源俊頼朝臣

たもひ草葉ずゑにむすぶしら露のたまゝきては手にもたまらず

むすぶモトかゝるトアリ今イロハニホヘ及散木集ニヨルたまらすホ及散木集ニかゝらすトアリ

女をうらみてつかはしける　春宮大夫公實

あし根はふ水のうへとぞ思ひしをうきはわが身にありけるものを

重服になりたる人のたちながらまうでこむと申たりければつかはしける　橘俊宗女

たちながらきたりとあはじふぢ衣ぬぎすてられん身ぞこれもへば

戀の心を人にかはりてよめる　前中宮上總

石はしるたきのみなかみはやくより音にきゝつゝこひわたるかな

皇后宮女別當

題不知

イハニヘニヨリテ知ノ三字ヲ不題カフ

たのめたく言の葉だにもなきものを何にかゝれるつゆのいのちぞ

女ノ字ニホヘニ無シ

金葉和歌集巻第八

戀歌下

良暹法師

初戀の心をよめる

かすめてはたもふ心をしるやこてはるのそらにもまかせつるかな

公任卿家にて紅葉、あまの橋立、戀といふ三の題を人々によませ侍けるにたそくまかりて人々みな書ける程なりければ三の題をひとつによめるうた

藤原範永朝臣

こひわたる人にみせばや松の葉もしたもみぢするあまのはしだて

源師俊朝臣

後朝の戀の心をよめる

あまの橋立モトアリ海橋立トカクル

ハニトヨリテ今イ

ドル袋草子ニヨリテ海橋立ハアレド

例ハトカクル

いふノ二字イニヨリテ

加フ

にモトさトアリ今イロニホヘトニヨル

しの〻めのあけゆく空もかへるには涙にくる〻ものにぞありける　内大臣

月ニ増ル戀こいへることをよめる

いとゞしくたも影にたつこよひかな月みよとこしもちぎらざりしを　藤原顯輔朝臣

戀の心を

こひわびてねぬ夜つもればしきたへの枕さへこそうとくなりけれ　鳥羽殿の歌合に戀のこゝろをよめる　藤原仲實朝臣

よとともに袖のかわかぬわがこひやとしまが磯によするしらなみ　晩レの戀こいへることをよめる　中納言雅定

つモトゆトアリ今イロハニチニヨル

あふことをこよひと思はぐゆふづく日いる山のはも嬉しからまし　戀の心をよめる　右兵衛督伊通

山の井のいはもるみづに影みればあさましげにもなりにけるかな

皇后宮にて人々戀の歌つかうまつりけるによめる　太宰大貳長實

みちのくの思ひしのぶにありながらこゝろにかゝるあふの松ばら

ならの人々百首歌よみけるに恨の心をよめる　權僧正永緣

たもはんことたのめし人のむかしにもあらずなるこの恨めしきかな

戀の心を讀る　隆源法師

くるゝまもさだめなきよにあふ事をいつこもしらでこひ渡るかな

藏人家時かれ〴〵になりけるを恨ていひつかはしける　前中宮越後

る

人ごころあさぐは水のねぜりこそこるばかりにもつまゝほしけれ

俊忠卿家にて戀の歌十首人々よみけるに立聞戀こい

こゝろモトかるトアリ今イロホトチニヨル立聞戀ニホ

ニハたちぎくこひイハロニハたちぎきてこふ家集ニハたちぎきの戀トアリ
にきモトけリトアリ今ハニホ及家集ニヨル

へる事をよめる　　修理大夫顯季

わきも子がころもたちぎきしから衣その夜のつゆにそではぬれにき

我をばかれ〳〵になりてこと人の許へまかるとき〻

てつかはしける　　よみ人しらず

ことわりや思ひくらぶのやまざくらにほひまされる花をづめるも

郁芳門院根合に戀の心をよめる　　周防内侍

こひわびてながむるそらのうきくもやわがしたもえの煙なるらん

人をうらみて五月五日につかはしける　　前齋宮河内

あふ事のひさしにふけるあやめ草たゞかりそめのつまとこそ見れ

戀の心をよめる　　太宰大貳長實

つらきをも思ひもしらぬ身のほどにこひしさいかで忘れざるらん

中モトト齋アリ今イロハニホヘトチニヨル

題しらず　　前中宮上總

さきの世のちぎりを知らではかなくも人をつらしと思ひけるかな

戀の歌よみける所にてよめる　　源俊頼朝臣

わすれ草しげれるやどをきてみれば思ひのきよりたふるなりけり

人をうらみてよめる　　よみ人しらず

今よりはたもひもいでじ恨めしといふもたのみのかゝるかぎりぞ

逢不遇戀をよめる　　左兵衛督實能

思ひきやあひ見しよはの嬉しさにのちのつらさのまさるべしとは

人をうらみけるころこゝちゝ例ならずはべりければよめる　　よみ人しらず

あはずともなからん世には思ひいでよわれゆゑ命たえしひとぞと

女のがりつかはしける　　藤原永實

はべりイロハホヘニおぼえとアリ
意尊法師ノ歌ナリ緒言作者考證ノ條ヲ見ヨ
永モトト長アリ今イロハニホヘトチニヨル

する墨もたつるなみだに洗はれてこひしこだにもえこそかゝれね

家の歌合に初タル戀を　中納言國信

いろ見えぬこゝろばかりはしづむれど涙はえこそしのばざりけれ

題しらず　よみ人しらず

あふことは夢ばかりにてやみにしをさこそみしかど人にかたるな

大納言經信

にモトノアリ今イロハニホヘ及家集一本ニヨル

あし垣にひまなくかゝるくものいの物むつかしくしげるわがこひ

藤原忠隆

たさふれどあまる涙はもるやまのなげきにたつるしづくなりけり

なき名たちける比月を見てよめる　橘俊宗女

いかにせんなげきのもりは茂けれど木の間の月のかくれなきよを

もの申ける人の久しう音もせざりければつかはしける

ロニトニ肥前トアリ

かやぶきのこや忘らるゝつまならんひさしく人のたゞづれもせぬ

前齋院肥後

戀の心をよめる　左兵衛督實能

わがこひの思ふばかりの色にいでばいはでも人にみえましものを

もろともに郭公をまちけるにさはる事ありていりにける後なきつやなど尋けるを聞てよめる

春宮大夫公實

ほとゝぎす雲ゐのよそになりしかばわれぞなごりの空になかれし

冬戀といへる事を　藤原成通朝臣

水のたもにふるしら雪のあとかたもなく消えやしなまし人のつらさに

多聞といへるわらはをよびに遣したりけるに見えざりければ月のあかゝりける夜よめる

もモトウトアリ今イロハニホヘトニヨル

あとロホヘトニかたトアリ

まつ人のたほぞらわたる月ならばぬるゝたもとにかげはみてまし

ホヘニヨリテなチ加フ

寄氷鳥戀

權僧正永緣

あふ事もなぎさにあさるあし鴨のうきねをなくこひこはしらずや

結句モトシるらめや人トアリ今イロハニホヘニヨル

攝政左大臣

人をうらみてよめる

藤原盛經母

さのみやはわが身のうきになしはてゝ人のつらさを恨みざるべき

ロニトニヨリテ藤原ノ二字チ加フ

攝政左大臣家にて戀の心をよめる　源雅光

名にたてるあはでの浦のあまだにもみるめはかづく物とこそきけ

イハトニハむかしおもひいでられてよめるトアリ

うらめしき人のあるにつけて昔思出でらるゝことあ

前齋宮甲斐

りて

いま人のこゝろをみわの山にてぞすぎにしかたはたもひ知らるゝ

たるニたりけるトアルニヨル

わすれたりける人のたもひいでてたこづれたりける

橘俊宗女

めづらしやいは間によごむわすれ水いく世をすぎて思ひいづらん

世モトセトアリ今ヘニヨル

山の歌合に戀の心をよめる

よみ人しらず

たまさかにあふ夜は夢のこゝちして戀しもなごかうつゝなるらむ

いかでかこれもふ人のさもあらぬさきにさぞなご人

中原章經

の申ければよめる

こひわぶる君にあふてふ言の葉はいつはりさへぞうれしかりける

君ハニ人トアリ

伊賀少將がもとへつかはしける

前中納言資仲

よものの海の浦々ごとにあされごもあやしく見えぬいけるかひかな

前帥中納言ハニヘニ前帥トアリ

返し

伊賀少將

たまさかに波のたちよるうらゝは何のみるめのかひかあるべき

物たもひ侍けるころ月のあかゝりける夜あかざりし

たもかげ常よりも堪がたくて讀る　橘俊宗女

つれ〴〵こ思ひぞいづる見しひとをあはでいく月ながめしつらん

だいしらず　上總侍從

あさましくなみだにうかぶわがみかな心がろくはたもはざりしを

（くモトやトアリ今ニホトニヨル）

物へまかりける道にはした物のあひたりけるをこは

せ侍りければ上東門院に侍るすまひこそこなん申こ

（イロハニトチニヨリテ侍リチカフ）

いひけるを聞て讀る　源緣法師

名きくよりかねてもうつる心かないかにしてかはあふべかるらん

戀の心をよめる　民部卿忠教

こひわびてたえぬ思ひのけぶりもやむなしき空のくもこなるらん

女のもこへつかはしける　大納言經信

あふことをいつこもなくてあはれわがしらぬ命にこしをふるかな

（をロハニホヘチニはトはハ）

ある所にて女房のながき髮をうち出して見せければ　藤原顯綱朝臣

よめる

ひこ知れずたもふ心をかなへなんかみあらはれて見えぬこならば

堀河院御時艶書合によめる　中納言俊忠

人しれぬたもひありそのうらかぜに波のよるこそいはまほしけれ

返し　一宮紀伊

たこにきく高師のはまのあだなみはかけじや袖のぬれもこそすれ

（はまロニトチニうらトアリ）

くれにはかならずこたのめたりける人のはつかの月

いづるまで見えざりければよめる　攝政家堀河

契りたきし人もこずゑの木の間よりたのめぬ月のかげぞもりくる

心かはりたる人のもこへつかはしける　江侍從

目のまへにかはるこゝろをなみだ川ながれてやこも思ひけるかな

國信卿家歌合に初戀の心をよめる　源兼昌

けふこそはいはせの杜のしたもみぢ色にいづればちりもしぬらん

雪のあしたに出羽辨がもとより歸り侍けるにかれよりわたくりて侍ける　出羽辨

送りてはかへれと思ひしたましひのゆきさすらひてけさはなき哉

返し　大納言經信

ふゆの夜のゆきげの空にいでしかど影よりほかにわたくりやはせし

すみかをしらせぬ戀といへることをよめる　前齋院六條

ゆくへなくかきこもるにぞひきまゆのいとふ心のほどはしらるゝ

世にあらんかぎりはわすれじと契りたりける人の久しう音もせざりければよめる　よみ人しらず

人はいさありもやすらん忘られてとはれぬ身こそなきこゝちすれ

こしごろ物申ける人のたえてたとづれざりければつかはしける　よみ人しらず

はやくよりあさきこゝろを見てしかばたもひたえにき山川のみづ

題しらず

もらさばやほそだに川のうもれみづかげだにみえぬ戀にしづむと

男のけふはかたたがへに物へまかるといはせて侍ければつかはしける

君こそはひと夜めぐりの神ときけなにあふことのかたたがふらん

後朝戀の心を　藤原顯輔朝臣

てモトエトアリ今イロハニホヘトニヨル

イロハニホトニヨリテチ加フ

ことハニもの集のトアリ家かハ物なりけりトアリ

あづさ弓かへるあしたの思ひにはひきくらぶべきこのなきかな

人のもとよりせめて恨みて袖のぬるゝさまを見せば　皇后宮少將

やなごいはせたりければよめる

うらむこもみるめもあらじ物ゆゑになにかはあまの袖ぬらすらん

旅宿戀こいへることをよめる　修理大夫顯季

袖のぬるゝモトト袖ぬらすトアリ今イハニホヘニヨル

こひしさをいも知るらめやたび寐して山のしづくに袖ぬらすこは

人の夕がたまうでこんと申たりければよめる　一宮紀伊

うらむなよ影みえがたきゆふづく夜たぼろげならぬ雲間まつ身ぞ

藏人にて侍ける比内をわりなくいでて女のもとにまかりてよめる　藤原永實

三日月のたぼろげならぬこひしさにわれてぞいづる雲のうへより

周防内侍したしくなりて後ゆめ〳〵此事もらすなと申ければよめる　源信宗朝臣

あはぬ夜はまどろむほどのあらばこそ夢にもみきと人にかたらめ

なき名たつこいへる事をよめる　左京大夫經忠

ひとしれずなき名はたてどからごろも重ねぬそではなほぞ露けき

人を恨て讀る　大中臣輔弘女

あぢきなくすぐる月日ぞうらめしきあひみし程をへだつと思へば

三井寺にて人々戀歌よみけるによめる　僧都公圓

ひモトハトアリ今ニホヘトニヨル

つらしとも思はんひとは思ひなんわれなればこそ身をばうらむれ

かたらひける女のもとにまからんなど申けれどさはる事ありてまからざりければ五月雨のころたくりて

侍ける　　よみ人しらず

さみだれの空だのめのみひまなくて忘らるゝ名ぞよにふりぬべき

返し　　左兵衛督實能

忘られんなはよにふらじ五月雨もいかでかしばしをやまざるべき

題しらず　　よみ人しらず

あま雲のかへしのかぜの音せぬはたもはれじこのこゝろなるべし

あしひきのやまのまに〳〵たふれたるからきは獨ふせるなりけり（ふせるハニぬるよトアリ）

津の國のまろやは人をあくたがはきみこそつらきせゞは見えしか

あふみてふ名はたか島にきこゆれどいつかはこゝにくる本のさと（かモトらトアリ今ハニヘニヨル）

かさこりの山によをふる身にしあればすみやきもをるわが心かな（るモトりトアリ今ニホヘトニヨル）

みくま野にこまのつまづく青つゞら君こそまろがほだしなりけれ

こりつむるなげきをいかにせよとてか君にあふごの一すぢもなき（むトニめトアリ）

あふごなきものこしる〳〵何にかはなげきを山ごこりはつむらん

はかるめる言のよきのみたほければ空歎きをばこるにやあるらん（けイニホトニかトアリ）

あふこゝの今はかたみのめをあらみもりて流れむなこそをしけれ

あふ事はかたねぶりなる磯ひたひひねりふすこもかひやなからん（ひれりイハニニれふりトアリ）

あふみにかありこいふなるかれひやま君はこえけり人こねぐさし（かれひモトかれいひトアリ今ロハホニヨル）

あふ事のかたのに今はなりぬれば思ふがりのみゆくにやあるらん

あふ事はながめふる屋のいたびさしさすがにかけて年のへぬらん（ひさしロニヘチニしトみトアリ）

かしがまし山のしたゆくさゞれ水あなかまわれも思ふこゝろあり

ぬす人こいふもこゝわりさよなかに君がこゝろをこりにきたれば

はなうるしこやぬる人のなかりけるあなはらぐろの君がこゝろや

寄石戀こいへる事をよめる　　前齋院六條

あふことをこふ石神のつれなさにわがこゝろのみうごきぬるかな

攝政左大臣家にて戀のこゝろをよめる　源雅光

數ならぬみをうぢ川のはしぐ〳〵こいはれながらもこひわたるかな

戀歌十首人々よみけるに來不留イハニトニハくれごもとまらずトアリ家集ニハきてはとまらぬ戀トアリ

修理大夫顯季

たまつしまきしうつ波のたちかへりせないでましぬ名殘さびしも

戀の歌とてよめる　春宮大夫公實

あふ事はふなびこよわみこぐ舟のみをさかのぼるこゝちこそすれ

こゝろからつきなき戀をせざりせばあはで闇にはまごはざらまし

顯仲卿女

見かはしながらうらめしかりける人によみかけゝる

內大臣家小大進

かくばかり戀のやまひはたもけれごめにかけさげてあはぬ君かな

攝政左大臣家にて時々逢戀あへりふこいへる事をよめる　源顯國朝臣

ホニ時々逢戀トニ時々あふトアリ

わが戀はしづのしけ絲すちよわみたえ間はたほくくるはすくなし

戀の歌人々よみけるによめる　源俊頼朝臣

あさましやこはなにごとのさまぞこよ戀せよとても生れざりけん

寄夢戀をよめる　源行宗朝臣

つらかりし心ならひにあひ見てもなほゆめかこぞうたがはれける

俊忠卿家にて戀の歌十首人々よみけるにたこしめて

あはずこいへる事をよめる　源俊頼朝臣

あやしきも嬉しかりけりたこしむるその言の葉にかゝること思へば

んモトリトアリ今ホ及家集ニヨル

此歌既ニ戀上ニ出デタリ

金葉和歌集巻第九

雜歌上

ロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレソツネナラムウヰノオクヤマケフコエテアサキユメミシヒモセスン

むかし道方卿にぐしてつくしにまかりて安樂寺にまゐりて見侍りけるみぎりのうめの我任にまゐりてみれば木のすがたはたなじさまにて花の老木になりてところ〴〵さきたるを見てよめる　大納言經信

木のすがたはイロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレソツネナラムウヰノオクヤマケフコエテアサキユメミシヒモセスン

かみ垣にむかしわがみしうめの花ごもにたい木となりにけるかな

山家鶯といへる事を人々によませ侍けるついでに　攝政左大臣

山ざともうきよのなかをはなれねば谷のうぐひすねをのみぞなく

圓宗寺の花を御覽じて後三條院御事などたぼしいで
てよませたまへりける　三宮

うゑたきし君もなきよにとしへたる花はわが身のこゝちこそすれ

花見御幸を見て妹の內侍のもとにつかはしける　權僧正永緣

ゆく末のためしとけふをたもふとも今いくとせかひとにかたらん

返し　內侍

いくとせも君ぞかたらんつもりゐてたもしろかりし花のみゆきを

大峯にてたもひもかけず櫻の花の咲たりけるをみて　僧正行尊

よめる

もろともにあはれとたもへ山ざくらはなよりほかにしる人もなし

堀河院御時殿上人あまたぐして花見ありきけるに仁

はモトもトアリ今イロニハホヘトチニヨルル

和寺に行宗朝臣ありとき〻て檀紙やあるとたづねて
侍ければつかはすとてうへに書付侍ける歌　源行宗朝臣

いくとせにわれなりぬらんもろ人のはなみる春をよそにき〻つゝ

山里に人々まかりて花の歌よみけるによめる　源定信

みな人はよし野のやまのさくら花をりしらぬ身やたにのうもれ木

後三條院かくれさせたはしまして後又の年の春盛り
なる花をみてよめる　左近府生右近將曹秦兼方

こぞみしに色もかはらずさきにけり花こそものはたもはざりけれ

つかさめしのころよろづにうらやましき事のみきこえ
ければよめる　藤原顯仲朝臣

イホニ左近府生トアリ

こしふれど春にしられぬうもれ木は花のみやこにすむかひぞなき

藏人たりて臨時の祭の陪從(ベイジュウ)し侍けるに右中辨伊家が

もとにつかはしける　藤原惟信朝臣

やまぶきもたなじかざしのはななれごくもゐの櫻なほぞこひしき

隆家卿太宰帥に二たびなりて後のたび香椎御社に

まゐりたりけるに神主ここのもとに杉の葉を折りて

帥のかうぶりにさすとてよめる　神主大膳武忠

ちはやぶるかしひのみやの杉の葉をふたゝびかざすわがきみぞ君

源心座主になりて初て山にのぼりたりけるにやすみ

けゝる所にて歌よめと申ければよめる　良暹法師

年をへてかよふ山路はかはらねどけふはさかゆくこゝちこそすれ

（モトこのもとのトアリ今イロハニホヘトチリヌルヲ）

（けモトたトアリ今イロハニホヘトチリヌルヲ）

藤原基清が藏人にてかうぶりたまはりてたりにけれ

ば又の日つかはしける　藤原家綱

たもひかねけさは空をやながむらん雲のかよひ路かすみへだてゝ

一品宮天王寺にまゐらせ給ひて日比御念佛せさせ給

ひけるに御ともの人々住吉にまゐりて歌よみけるに

よめる　源俊頼朝臣

いくかへり花さきぬらんすみよしの松もかみ代のものこそきけ

田家老翁といへるこゝをよめる　中納言基長

ますらをは山田のいほにたいにけりいまいく秋にあはんとすらん

仁和寺にすませ給ひける比いつまでさてはなごみや

こより人のたづね申たりければよませ給へる　三宮

かくてしもえぞすむまじき山ざとのほそだに川のこゝろぼそさに

大峯の笙のいはやにてよめる　僧正行尊

草のいほをなに露けしとたもひけんもらぬ岩やもそではぬれけり

良暹法師うらむる事ありけるころむつき一日にまう

できて又久しうみえざりければいひつかはしける　律師慶範

師ノ下モトナノ字アリ今ハニホニ無キニヨル

春のこしその日つらゝはとけにしをまた何ごとにとぐこほるらん

對山待月といへる事をよめる　藤原正季

このよには山のはいづる月をのみまつことにてもやみぬべきかな

山家にて有明の月を見てよめる　僧正行尊

木の間もるかたわれ月のほのかにもたれかわが身を思ひいづべき

宇治前太政大臣ときのうたよみどもに月の歌よませ

けるにもれて公實卿のもとにつかはしける　源師光

かすが山みねつゞきてるつきかげに知られぬたにの松もありけり

僧都賴基光明山にこもりぬときゝてつかはしける　橘能元

うらやましうきよをいでていかばかり隈なきみねの月をみるらん

返し　僧都賴基

もろともに西へやゆくとつきかげのくまなき峯をたづねてぞこし

郁芳門院伊勢にはしましけるときあからさまにく

だりけるにすぐか川をわたりけるときよめる　六條右大臣北方○源顯房室

はやくよりたのみ渡りしすぐか川たもふことなるたこぞきこゆる

源仲正がむすめ皇后宮に始めてまゐりたりけるに琴

イロハニヘチニヨリテセチ加フ

ひくときかせ給ひでひかせ給ひければつゝましながらひきならしけるをきゝてくちずさびのやうに

ていひかけゝる　攝津

ここの音や松にふく風にかよふらん千世のためしにひきつべきかな

初ニイニことのねにまつふく風やトアリ

返し　美濃

うれしくも秋のみやまのまつ風にうひこゝの音のかよひけるかな

けトニぬトアリ

月のあかゝりける夜人の琴ひくをきゝてよめる　内大臣家越後

ここの音はつきの影にもかよへばや空にしらべのすみのぼるらん

伊勢國の二見浦にてよめる　大中臣輔弘

たまくしげふた見のうらのかひしげみまきゐにみゆる松のむら立

宇治前太政大臣布引の瀧見にまかりたりけるこもに　大納言經信

まかりてよめる

しら雲とよそにみつればあしひきの山もこぐろにたつるたきつ瀬

あまの河これやながれのすゑならん空よりたつるぬのびきのたき

ばハ及家集ニごトアリ

あまの河ノ歌トニおなじたきにまかりてよめるトアリ

選子内親王いつきにはしまましける時女房にもの申

よみ人しらず

さんとてしのびてまゐりたりけるにさぶらひごもい

かなる人ぞなどあらく申てこはせ侍りければたたう

あらく申てホニあらあらしくヘニあらくましくロチニあらくましけにトアリ

がみにかきてたかせ侍りける　藤原惟規

かきてノドニイハニホヘニさふらひにトアリ

神がきは木の丸ごのにあらねごも名のりをせねばひごこがめけり

郁芳門院伊勢にはしましける時あからさまにく

だりて侍りける時思ひかけずかねのこゑのほかのに

イロハニホヘチニヨリ

テのほのかにチ加フ

きこえければよめる　六條、右大臣、北方

神がきのあたりこれもふにゆふだすき思ひもかけぬかねの聲かな

前、齋宮伊勢にはしましける時寮頭保俊御まつりの程このゐ物のれうにきぬをかりて程すぎて是をわすれていまゝで返さぐりける事など申たりけるかへり　前、齋宮、內侍

ごこにいひつかはしける

かへさじとかねてしりにきから衣こひしかるべきわが身ならねば

人ハモトハ人トアリ今イニホヘチトニヨル

いづみしきぶ保昌にぐして丹後國に侍りけるころ都に歌合のありけるにこしきぶの內侍歌よみにこられて侍りけるを中納言定賴つぼねのかたにまうできて歌はいかゞせさせ給ふ丹後へ人はつかはしけんや使いまだまうでこずやいかに心もとなくたぼすらんな

使ノ下ニモトハノ字アリ今之チ削リハニホヘトニヨリテまだチ加フ

ごたはぶれて立けるをひきとゞめてよめる　小式部、內侍

たほ江やまいく野のみちの遠ければまだふみもみず天のはしだて

百首、歌の中に夢の心をよめる　修理、大夫顯季

うたゝねの夢なかりせばわかれにしむかしの人をまたみましやは

百首、歌、中に旅の心をよめる　參議師賴

小夜中にたもへばかなしみちのくのあさかの沼にたびねしてけり

この集撰じける時歌こはれてたくるこてよめる　藤原、顯輔、朝臣

イハニニヨリテ中ノ字チ加フ

家の風ふかぬものゆゑはづかしのもりのこゝの葉ちらしはてつる

しほ湯あみに西の海のかたへまかりたりけるにみるこいふ物をみづからつみて都なるむすめのもとへつ

つみイハニホヘニとりトアリ

かはすこて　　平康頼女

いそ菜つむ入江のなみのたちかへり君みるまでのいのちこもがな

かへし　　むすめ

長居するあまのしわざこみるからに袖のうらにもみつなみだかな

和泉式部石山にまゐりけるに大津にこまりて夜ふけてきゝければ人のけはひあまたしてのゝしりけるを尋ければあやしのしづのめがよねしらげ侍るなりこ申けるをきゝてよめる　　和泉式部

あやしのしづのめがよねしらげハニハ水へトイニ下人のハしもびと又のトアリ

さぎのゐる松ばらいかにさわぐらんしらげはうたて里こよみけり

公實卿のもこにまかりたりけるに侍らざりければ出居にたきたりける小弓をこりてさぶらひにこれはたろしつこふれていでにけりかの卿かへりて弓をたづねければ時房まうできてこりつこ申しければたごろきて院の御弓ぞこくかへせこいひにつかはしたりければ御弓につけてつかはしける歌　　藤原時房

あづさ弓さこそはそりのたかゝらめはる程もなくかへるべしやはをこかれ〳〵になりてほごへてたがひにわすれて後人にしたしくなりにけりなご申こきゝてなげきける人にかはりてよめる　　春宮大夫公實

なき名にぞ人のつらさは知られける忘られしには身をぞうらみし

大貳資通忍びてもの申けるをほごもなくさぞなご人の申ければよめる　　相模

いかにせん山田にかこふかき柴のしばしの間だにかくれなき身を

肥後内侍をここにわすられてなげきけるを御覽じて

よませ給ひける　堀河院御製

わすられて歎くたもとをみるからにさもあらぬ袖の萎れぬるかな

水車をみてよめる　僧正行尊

はやき瀬にたゝぬばかりぞみづ車われもうきよにめぐるこをしれ

れいならぬ事ありてわづらひけるころ上東門院に柑子たてまつるとて人にかゝせて奉ける　堀河右大臣

つかへつるこのみの程を數ふればあはれこずゑになりにけるかな

御返し　上東門院

すぎ來にける月日のかずも知られつゝこのみをみるもあはれなる哉

（來イニトアリ　かずイハホトニほどトアリ）

僧正行尊まうできてよるこゞまりてつこめて歸るこて獨鈷を忘れたりけるを返しつかはすとてよめる

くさまくらさこそは旅のこころめけさしもたきて歸るべしやは

（旅ねのこそたびれのトアリ　二句ニニさ）

大納言宗通

をこ心かはりてまうで來ず成にける後たきたりけるゑぶくろをこりにたこせたりければかきつけてつかはしける　櫻井尼

のきばうつま白のたかの餌ぶくろにたきゑもさゝでかへしつる哉

後冷泉院御時近江國より白き烏を奉たりけるをかくして人にもみせさせ給はざりければ女房たちゆかしがり申ければたの〳〵歌よみて奉れさてよくよみたらん人にみせんこたほせごこありければつかうまつれる　少將内侍

たぐひなくよにたもしろき烏なればゆかしからずこたれか思はん

甲斐國よりのぼりてをばなる人のもとにありけるが
はかなき事にてそのをばのなありそとてわひいだし
たりければよめる　　よみ人しらず

鳥の子のまだかひながらあらませばをばこいふ物はわひでざらまし
（でロニヘトチニいでトアリ）

百首歌の中に山家をよめる　　修理大夫顯季

ひぐらしの聲ばかりする柴の戸はいり日のさすにまかせてぞ見る

題しらず　　藤原仲實朝臣

年ふればわがいたぐきにわたく霜をくさのうへともわけるかな
（實モト真トアリ今イロハニホヘチニヨル）

殿上わりて侍けるころ人の殿上しけるをきゝてよめる
（ロホチニヨリテてチ加フ）

源行宗朝臣

うらやまし雲のかけはしたちかへりふたゝびのぼる道をしらばや

殿上申けるにゆるされざりければよめる
（にモト比トアリ今ロニヘチニヨル）

たもひきやくもゐの月をよそにみてこゝろの闇にまどふべしとは

平忠盛朝臣

かたらひ侍ける人のかれ〳〵になりければこと人に
つきてつくしの方へまかりなんとしけるをきゝてを
ここのもとよりまかるまじきよしを申たりければい
ひつかはしける　　內大臣家小大進

身のうさもとふひともじにせかれつゝ心づくしのみちはとまりぬ
をとこのなかりける夜こと人をつぼねにいれたりけ
るにもとの男まうできあひたりければさわぎてかた
はらのつぼねの壁のくづれよりくゞりてにがしやり
て又の日その逃したるつぼねのぬしのがりよべのか
べこそうれしかりしかなごいひつかはしたりければ

よめる
よみ人しらず

ねぬるよのかべ騒がしくみえしかどわがちがふれば事なかりけり

源頼家がもの申ける人の五節に出て侍けるをきゝて

まことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりの

くもりなきよに　とよみてつかはしたりければかへ

しによめる
源光綱母

日かげにはなき名たちけりをみ衣きてみよこゝそいふへかりけれ

經信卿にぐしてつくしに侍ける比肥後守盛房野太刀

のよきありみせんなど申て程へにければいかになど

たづねけるに忘れたるよしを申ければよめる

けるにモトられてトアリ今散木集ニヨリテ改ム此ハシ作イハニホヘトイタク異ナリ

源俊頼朝臣

なき影にかけゝるたちもあるものをさやつかのまに忘れはてぬる

大峰の神仙といへる所に久しう侍ければ同行どもみ

なかぎりありてまかりにければ心ぼそさによめる

僧正行尊

見しひとはひとりわが身にそはねどもたくれぬものは涙なりけり

たゞならぬ人のもてかくしてありけるに子をうみて

けるがもとよりうみたる梅をたこせたりければよめ

る

よみ人しらず

葉がくれにつはるとみえし程もなくこはうみ梅になりにけるかな

堀河院御時中宮の女房達を亮仲實が紀伊守にて侍け

る時若浦みせんとてさそひければあまたまかりける

にまからでつかはしける

前中宮甲斐

ひとなみに心ばかりはたちそひてさそはぬわかのうらみをぞする

保實卿ほかにうつりてのちかのもとの所につねに見
ける鏡をとがせ侍けるがくらきよしを申けるを聞て
よめる　　藤原實信朝臣母

こゝわりや曇ればこそはますかゞみうつりし影もみえずなるらめ

月の入をみてよめる　　源師賢朝臣

西へゆくこゝろはわれもあるものをひとりないりそ山のはのつき　秋の夜

爲仲朝臣陸奥守にて侍ける時延任しつゝきゝてつかはしける　　藤原隆資

まつわれはあはれ八十になりぬるをあふくま川のこほざかりぬる

したしき人の春日にまゐりて鹿のありつるよしなど
申けるをきゝてよめる　　藤原實光朝臣

みかさやま神のしるしのいちじるくしかありけりときくぞ嬉しき

入ノ下ニモトヌルアリ今ハ白ロ水ニ無チ従フ　　山のはロ水ヘニ秋のよトアリ

屏風のゑにしかすがのわたりゆく人たちわづらふかたかける所をよめる　　藤原家經朝臣

ゆく人もたちぞわづらふしかすがのわたりや旅のゝまりなるらん

題しらず　　よみ人しらず

身のうさをたもひしゝけばふゆの夜もゝどこほらぬは涙なりけり

上陽人苦最多、少亦苦、老亦苦といへる心をよめる　　源雅光

むかしにもあらぬ姿になりゆけゝなげきのみこそたもがはりせね

青黛畫眉眉細長といへるゝをよめる　　源俊頼朝臣

さりともかくまゆずみのいたづらに心ぼそくもたいにけるかな

こしひさしく修行しありきて熊野にてげんくらべし

上ノ亦モト思トアリ今イハ及白氏文集ニヨル

けるを祐家、卿まゐりあひて見けるに事の外にやせたところべてすがたもあやしげにやつれたりければ見忘れてかたはらなる僧にいかなる人ぞこゝのほかにしるしありけなる人かななど申けるをきゝてつかはしける

僧正行尊

こゝろこそ世をばすてしかまぼろしの姿もひとにわすられにけり

大中臣、輔弘祭主あかざりけるころ祭主になさせ給へと太神宮に申てねいたりける夜の夢にまくらがみにしらぬ人のたちてよみかけゝる歌

草の葉のなびくもまたず露の身のたきごころなくなげくころかな

六條右大臣六條の家つくりていづみなごほりてこくわたりて見よなど申たりければよめる

ぞイハホニにかトアリ
イハニホトチニヨリテなテ加フ

主ノ下モトにもノ二字アリ今イハホニ無キニ従フ
かモトらトアリ今イハニホヘトイハニヨル
申ノ下モトこひノ二字アリ今イハニホヘトイハニ無キニ従フ
草の葉のモトにトアリ今イロハニホヘチ及袋草紙ニヨル

千年まですまむいづみの底によも影をならべんこれもひしもせじ

顯雅卿、母

宇治平等院、寺主になりて宇治にすみつきてひえの山のかたをながめやりてよめる

忠快法師

宇治川のそこのみくづとなりながらなほ雲かゝるやまぞこひしき

家を人にはなちてたつことて柱にかきつけ侍ける

周防、内侍

住みわびてわれさへのきのしのぶ草しのぶかたぐ〳〵しげき宿かな

賀茂、成助に初てあひてもの申けるついでにかはらけ取て讀る

津守、國基

きゝわたるみたらしがはのみづきよみそこの心をけふぞみるべき

返し

賀茂、成助

まタすモトしらでトアリ今イハホチ及袋草紙ニヨル
底によもモトきよみトアリ今イハトニホヘトニヨル
イハニホヘニヨリテ影ノ下ニなナ加フ

すみ吉のまつかひありてけふよりはなにはの事もしらすばかりぞ

皇后宮弘徽殿にわはしましける比俊頼西れもてのほ

そゝのにてたちながら人に物申けるに夜のふけゆく

けるモト侍トアリ今ロハニホトニヨル

まゝにくるしかりければ土にゐたりけるを見てたゝ

みをしかせばやと女の申ければたゝみは石だたみし

かれて侍めりと申を聞てよめる　皇后宮大貳

イロハニホヘトニヨリテたゝみはノ四字チ加フ

石だたみありけるものを君にまたしくものなしとれもひけるかな

大原の行蓮聖人がもとへ小袖つかはすとてよめる

天台座主仁覺

あはれまんと思ふ心はひろけれゝはぐくむ袖のせばくもあるかな

百首歌の中に述懷の心をよめる　源俊頼朝臣

世のなかはうき身にそへる影なれや思ひすつれゝはなれざりけり

をとこにつきて越前國にまかりたりけるに男心かはりてつねにはしたなめければ都なるたやのもとへい

ひつかはしける　よみ人しらず

うちたのむ人のこゝろはあらち山こしぢくやしき旅にもあるかな

かへし　たや

たもひやるこゝろさへこそ苦しけれあらちの山のふゆのけしきは

たもふ事侍ける比よめる　參議師賴

いたづらにすぐる月日をかぞふればむかしを忍ぶねぞなかれける

かゞみをみるに影のかはりゆくをみてよめる　源師賢朝臣

かはりゆくかゞみの影をみるからにたいそのもりのなげきをぞする

前太政大臣の家に侍ける女を中將忠宗朝臣と少將顯

イハホニヨリテめチ加フ

はモトをトアリ今イロヘニホヘトチニヨル

結句イニホニれこそなかるれトアリ

イニホニたびトアリ

イハニホヘ
ニヨリテ朝
臣チ加ヘイ
ロハニホニ
ヨリテニホ
加フ

國ここもにかたらひ侍けるに忠宗朝臣にあひにけり
其後程もなく忘られにけりとき〻て女のがり云遣し
　　源顯國朝臣
けるる
こゆるぎのいそぎてあひしかひもなく波よりこずときくはまことか
藏人親隆がかうぶり給はりて又の日つかはしける
　　藤原公教
雲のうへになれにしものをあしたづのあふ事かたにたりゐぬる哉
堀河院御時源俊重が式部亟申ける申文に添て中納言重
資卿の頭辨にて侍ける時つかはしける
　　源俊頼朝臣
日のひかりあまねき空のけしきにもわが身ひとつは雲がくれつ〻
これを奏しければ內侍周防をめしてこれが返しせよ

るノ下モト
にアリ今イ
ロハニホヘ
ニトチ無キ
従フ

中納言以下
イハニホト
ニヨルル

ごたほせごとありければつかうまつれる
　　周防內侍
何かたもふ春のあらしにくもはれてさやけき影はきみぞみるべき
そののちなりにけりと云々

金葉和歌集巻第十

雜歌下

公實卿かくれ侍て後かの家にまかりたりけるに梅花盛にさけるを見て枝にむすびつけて侍ける歌　藤原基俊

むかし見しあるじがほにて梅がえのはなだにわれに物がたりせよ

返し　中納言實行

ねにかへるはなの姿のこひしくはたゞこのもとをかたみとは見よ

人々あまたぐして花見ありきてかへりてのち風れたこりてふしたりけるにぐして花見ける人のもとよりな

（テモトモトアリ今イロハニホヘトト及家集ニヨルル）

事ノ下モトニノ字アリ今イハニニ無キニ従フ

に事かなご尋て侍りければつかはしける　平基綱

さくらゆゑいとひし風の身にしみて花よりさきにちりぬべきかな

後三條院かくれたはしましてのち五月五日一品宮の御帳にさうぶふかせ侍けるにさくらのつくり花のさされたりけるを見てよめる　藤原有佐朝臣

あやめ草ねをのみかくる世のなかにをりたがへたる花ざくらかな

北方うせ侍て後天王寺にまゐりけるみちにてよめる　六條右大臣

なには江のあしのわかねのしげければ心もゆかぬふなでをぞする

郁芳門院かくれたはしまして又のとしの秋知信がりつかはしける　康資王母

祐イロハニホヘニ佐トアリ

江のモトかたトアリ今ロニホヘトチニヨル

うかりしに秋はつきぬとたもひしをことしも蟲のねこそなかるれ

下臈にこえられて歎き侍りけるころよめる　源俊頼朝臣

せきもあへぬなみだの川は早けれど身のうき草はながれざりけり

律師實源がもとにしらぬ女房の佛供養せんとてよばせ侍ければまかりてみれば事もかなはずげなるけしきをみてかたのごとくいそぎくやうして立ける程にすだれの内より女房手づからきぬひとへとまきゑの手箱をさし出したりければ從僧してとらせてかへりてみればしろがねの箱のうちにかきて入たりける　よみ人しらず

此歌ノ事緒言作者考證ノ條ニクハシ

ロニホニヨリテトチ加フ

歌

たまくしげかけごに塵もすゑざりしふた親ながらなき身とをしれ

ホヘトニヨリテテチ補フ

大路に子をすてゝ侍りけるたしくゝみにかきつけて

侍りけるうた

身にまさる物なかりけりみどり子はやらん方なくかなしけれども

あはの守知綱にたくれて侍けるころながされたりける

藤原知信母

る人のゆるされてかへりたりけるをきゝてよめる

よみ人しらず

ながれてもあふ瀬ありけり涙がはきえにしあわをなにゝたとへん

こゝち例ならず侍けるころ人のもとよりいかゞなど

申たりければよめる

藤原通宗朝臣

くれたけのふししづみぬる露の身もとふ言の葉にたきぞゐらるゝ

範永朝臣出家しぬとゝきゝて能登守にて侍けるころ國

よりいひつかはしける

よそながら世をそむきぬときくからに越路の空はうちしぐれつゝ

律師長濟かくれてのち母の其あつかひしてありける

夜の夢にみえける歌

ねモトメトアリ今イニレトアルニ従フ

たらちねのなげきをつみてわれはかくれもひのしたになるぞ悲しき

大藏卿匡房

顯仲卿むすめにたくれてなげきけるころ程へてとひ

むすめモト女子トアリ今イハニホニヨル

につかはすとてよめる

そのゆめをとはゞなげきやまさるとて驚かさでもすぎにけるかな

藤原賢子

従三位藤原賢子例ならぬ事ありてよろづ心ぼそくた

ぼえけるに人のもとよりいかゞなどとひて侍りけれ

ばよめる

かモトニトアリ今ロニホヘトニヨル

いにしへは月をのみこそながめしか今は日をまつわが身なりけり

身まかりてのち久しうなりにける母を夢にみてよめ

る

ゆめにのみむかしの人をあひみればさむる程こそわかれなりけれ　　權僧正永緣

人のむすめ母のものへまかりたりける程にたもき病をしてかくれなんこしける時かきたきて身まかりける歌　　よみ人しらず

つゆの身のきえもはてなば夏草のははいかにしてあらんこすらん

小式部ノ内侍うせてのち上東門院よりこしごろ給はりけるきぬをなきあこにもつかはしたりけるに小式部ノ内侍こ書付られたるをみてよめる　　和泉式部

もろこもに苔のしたにはくちずしてうづもれぬ名をみるぞ悲しき

したしき人にたくれてわざのことはてゝ歸り侍ける

によめる

今ぞしるたもひのはては世のなかのうき雲にのみまじるものこは　　平ノ忠盛ノ朝臣

陽明門院かくれたはしまして後御わざの事はてゝ又の日雲のたなびけるをみてよめる　　藤原ノ資信

さだめなき世をうき雲ぞあはれなるたのみしきみが烟こたもへば

白河院の女御かくれ給ひて後彼家の南面の藤の花さかりに咲たりけるをみてよめる　　僧正行尊

草木までたもひけりこもみゆるかな松さへふぢのころもきてけり

兼房ノ朝臣重服になりてこもりゐて侍けるに出羽ノ辨がもこよりこぶらひたりけるを是が返しせよこ申ければよめる　　橘ノ元任

かなしさのそのゆふ暮のまゝならばありへて人にこはれましやは

てけりモトたればトアリ今ロハホヘトチニヨルル

範國袋草紙ニハ實國俊ニ賴無名抄ニハされつなトアリ

範國朝臣にぐして伊豫國にまかりたりけるに正月より三四月までいかにも雨のふらざりければなはしろもせでよろづにいのりさわぎけれどかなはざりければ守能因歌よみて一宮にまゐらせて雨いのれと申けれはまゐりていのり申ける歌　能因法師

あまの河なはしろみづにせきくだせあまくだりますかみならば神

神感ありて大雨ふりて三日三夜やまずと家集に

みえたり

心經供養してその心を人々によませ侍けるに　攝政左大臣

色もかもむなしとことける法なれどいのるしるしはありとこそきけ

法文のありけるを里なる女房のもとより宮に申さず

ともしのびてあからさまにとりてなど申たりけるを

ほのきゝてよませ給ひける　三宮

見しまゝにわれは悟をえてしかば知らせでとると知らざらめやは

月のあかゝりける夜瞻西上人のもとへつかはしける　僧正行尊

いさぎよき空のけしきをたのむかなわれまどはすな秋のよのつき

例ならぬ事ありけるころいかゞなどたもひつゞけて

心細さに　源行宗朝臣

いかにせんうき世のなかにすみがまのはては烟となりぬべき身を

寶範聖人山寺にこもりぬときゝてつかはしける　靜嚴法師

こゝろにはいとひはてつと思ふらんあはれいづこも同じうきよを

こイハニホヘトニくトアリ

八月ばかり月のあかゝりける夜あみだの聖のこほり
けるをよばせさせ給ひてさゝなる女房にいひつかは
しける　　選子内親王

あみだ佛ゝゝなふるこゑに夢さめてにしへかたぶく月をこそみれ

モトよびよせさせてアリ今イハニホヘトニヨル

こそみれモトみるかなトアリ今イロハニホヘトチニヨル

依釋迦遺教念阿彌陀ゝいふ事をよめる　　皇后宮肥後

をしへたきていりにし月のなかりせばいかで心をにしにかけまし

イハホニレトアリ

清海上人後生を猶たそれ思ひてねぶり入たりける枕

るノ下モトニノ字アリ今イハニホニ無キニヨル

がみに僧のたちてよみかけゝる歌

かくばかりこちてふ風のふくをみてちりのうたがひ殘さずもがな

普賢十願の文に願我臨欲命終時といへる文をよめる
覺樹法師

いのちをも罪をも露にたゝへけり消えばこもにや消えんゝすらん
弟子品の心をよめる　　僧正靜圓

ふきかへすわしの山かぜなかりせばころものうらの玉をみましや
提婆品の心をよめる　　贍西上人

のりのためになふ薪にゝよせてやがてうき世をこりぞはてぬる
皇后宮權大夫師時

けふぞしるわしの高嶺にてるつきをたにがはくみし人のかげゝは
涌出品の心をよめる　　權僧正永緣

たらちねはくろ髮ながらいかなれば子のまゆ白きひゝなるらん
不輕品の心をよめる　　覺雅法師

ありがたき法をひろめしひじりにぞうちみし人もみちびかれける
藥王品の心をよめる　　懷尋法師

てるイハホヘニすむトアリ

のモトはトアリ今ニホヘトチニヨル

ありがたきノ歌イハニホヘトニハ永緣ノ作トセリ

しホニもトアリ

うき身をしわたすときけばあまをぶねのりに心をかけぬ日ぞなき

人のもとにて經供養しけるに五百弟子授記品の心を

ときけるに繫寶珠のことのたふとかりけるよしをよ

みてかづけものにむすびつけて侍けるをみてかへし

權僧正永緣

いかにしてころもの玉をしりぬらんたもひもかけぬ人もあるよに

此端作ニホヘニハ繫寶珠のたとへとなきけりてたふとかりのうらにけ物云トアリ

侘他のハのたとひを人々よみけるに此身は幻のごと

幻イハニホヘトニかけろふトアリ

しといへる事をよめる

懷尋法師

いつをいつと思ひたゆみてかげろふのかげろふ程のよを過すらん

常住心月輪といへる心をよめる

澄證イハニトニ證トアリリモトるトアリ今トチニヨル

澄成法師

よとともに心のうちにすむつきをありと知るこそはるゝなりけれ

舍利會イハニホニ櫻會トニ釋迦會

醍醐の舍利會に花のちるをみてよめる

櫻

醍醐トアリ醍醐さくらゑノ始マリシノ此集ハ奏聞ヨリ少シ後ニヤ

けふもなほをしみやせまし法のためちらす花ぞこれもひなさずは

珍海法師母

地獄の繪につるぎの枝に人のつらぬかれたるをみて

よめる

和泉式部

あさましやつるぎの枝のたわむまでこは何のみのなれるなるらん

人のもとに侍けるに俄にたえいりてうせなんとしけ

ればしとみのもとにかきいれて大路にたきたりける

に草の露のあしにさはる程郭公のなくをきゝていき

のしたによめる

田口重如

草の葉にかごではしたりほとゝぎすしでの山路もかくやつゆけき

かくてつひにたちいるとてよめる

たゆみなく心をかくる彌陀ほとけひとやりならぬちかひたがふな

イロハニホヘニヨリテのを加フ田ロハ恐ラクハ山ロノ誤

此歌ドモノ事緒言作者考證ノ條ニ云ヘリ

障子のゑに天王寺の西門にて法師の舟にのりてにし
ざまにこぎはなれてゆくかたかける所をよめる　源俊頼朝臣

阿彌陀佛ごとなふる聲をかぢにてやくるしき海をこぎはなるらん

連歌

ゐたりける所の北のかたに聲なまりたる人の物いひ
けるをきゝて　永成法師

あづま人のこゑこそきたにきこゆなれ

みちのくによりこしにやあるらん　律師慶範

もゝぞのゝ花をみて　賴經法師

もゝぞのゝもゝの花こそさきにけれ　公資朝臣

うめ津のうめはちりやしぬらん

賀茂の御社にて物つく音のしけるをきゝて　神主成助

しめのうちにきねのねとこそきこゆなれ

いかなる神のつくにかあるらん　行重

宇治にて田の中にたいたる男のふしたりけるを見て　僧正深覺

はるの田にすきいりぬべきたきなかな

宇治入道前太政大臣

深モト源トアリ今イロニヘ及尊卑分脈俊賴無名抄ニヨル

かのみなぐちに水をいればや　　觀暹法師

日の入るを見て

日のいるはくれなゐにこそ似たりけれ

あかねさすこもたもひけるかな　　平爲成

田中に馬のたてるをみて　　永源法師

田にはむこまはくろにぞありける

なはしろのみづにはかげこみえつれど　　永成法師

かはらやをみて　　よみ人しらず

かはらやの板ぶきにてもみゆるかな　　俊助成

助成イハヘニ助俊トアリ

つちくれしてやつくりそめけん　　爲助

しかの島をみて

つれなくたてるしかの島かな　　國忠

ゆみはりの月のいるにもたごろかで

宇治へまかりけるみちにて日ごろ雨のふりければ賀茂川の水出たりけるに男のはかまをぬぎて手にさゝげてわたるをみて　　賴綱朝臣

かも河をつるはぎにてもわたるかな　　信綱

かりばかまをばをしこたもひて

あゆをみて　　よみ人しらず

モトハ水の出て賀茂川を今水トアリニヨル

なに〻あゆるをあゆこいふらん　匡房卿妹

鵜舟にはこりいれしものをたぼつかな
和泉式部かもにまゐりけるにわらうづにあしをくはれて紙をまきたりけるをみて　神主忠頼

ちはやぶるかみをばあしにまくものか　和泉式部

これをぞしものやしろとはいふ

源頼光が但馬守にてありける時館の前にけた川こいふ川のあるかみより舟のくだりけるを葬あぐるさぶらひしてこはせければ蓼ど申ものかりてまかるなりこいふをき〻てくちすさびにいひける

ありもとのぼりとアリ今イロハニヨル
のあるもとアリ今イハホニヨル

たでかる舟のすぐるなりけり　源頼光朝臣

これを連歌にき〻なして

あさまだきからろのねこのきこゆるは　相模母

すまひぐさこいふ草のねほかりけるをひきすてさせけるをみて　よみ人しらず

ひくにはつよきすまひぐさかな
こる手にははかなくうつる花なれど

鳥を籠に入て侍けるがよこ雨にぬれけるをみて

あめふればきじもしこ〻になりにけり
かさ〻ぎならばか〻らましやは

簑むしのうめの花咲たる枝にあるをみて

つよきもとアリ今イニホヘニヨル
よわきもとアリ今イニホヘニヨル

うめの花がさきたるみのむし　律師慶運

まへなるわらはのつけゝる
あめよりはかぜふくなとや思ふらん　頼算法師

鵜の水にうかべるをみて
あらうとみれどくろきとりかな　よみ人しらず

俊頼ノ附ケタルナリ散木集ニ見エタリ

さもこそはすみの江ならめよとともに
たきの音のよるまさるをきゝて　よみ人しらず

よるたとすなりたきのしらいと
くりかへしひるもわくとはみゆれども
柱をみて　成光

たくなるをもやはしらとはいふ　觀運法師

みわたせばうちにもとをばたてゝけり
七十になるまでつかさもなくてよろづにあやしきこ
とをたもひつゞけて　源俊頼朝臣

なゝそぢにみちぬる潮のはまひさぎ久しくよにもうもれぬるかな

きモトシトアリ今ロハニホチ及散木集ニヨル

被除歌

イ本ロ本チ本抄本ニアリテハ本ニ本ホ本ニ無キ歌（ヘ本ハ脱漏極メテ多ケレバ今ハ省ミズ）

花を讀侍りける（○抄本春、さくらさくをつくるノ次）

右兵衛督伊通

しら雲とみねにはみえてさくらばなちればふもとの雪ここそなれ

源盛清

卯花をよめる（○夏、しづのめがあしびたくやもノ次）

うの花をたこなしがはの波かこてねたくもをらですぎにけるかな

大中臣定長

うのはなの青葉もみえずさきぬれば雪にこは名のみかはるなりけり

人々十首歌よみけるに郭公をよめる（○夏、まちかねてたづねざりせばノ次）

中納言實行

なモトみトアリ今イ及續詞花集ニヨル

は名モト花トアリ今ヘ本トアリ王勝間ノ説トニヨルノ字イヘニハ其上ノトニトアリ

中納言實行ヘニ大中臣公長トアリ
とノ上ヘニかノ字アリ

いなり山たづねやみましほこゝぎすまつにしるしのなきこ思へば

待ニ草花一といへることをよめる　○秋、まくずはふぁだの大野のノ次

皇后宮ノ美濃

藤ばかまはやほころびてにほはなん秋のはつかぜふきたゝずとも

後冷泉院ノ御時殿上の歌合に月の心をよめる　○秋、風ふけばえだやすからぬノ次

大納言經信

月かげのすみわたるかなあまのはら雲ふきはらふよはのあらしに

鹿の歌とてよめる　○秋、世の中をあきはてぬとやノ次

藤原ノ行家

秋ならでつまよぶ鹿をきゝしがなをりからこゑの身にはしむかこ

思ニ野花一といへる事をよめる　○秋、あだし野のつゆふきみだるノ次

藤原ノ伊家

モト題ナシ今ヘニヨル
だにヘ本、續詞花、千載ニさへトアリ
よるヘ本、續詞花、千載ニよはトアリ
千鳥をよめるト云フ題モト無シ今ヘニヨル
寄泉戀モト後朝の心をよめるトアリ今散木集ニヨル

今はしもほにいでぬらんあづまぢの岩田の小野のしの〻をすゝき

河霧をよめる　○秋、うぢ川のかはせもみえぬノ次

藤原ノ行家

川ぎりのたちこめつればたかせ舟わけゆくさをのたこのみぞする

時雨を　○冬、山川の水はまさらでノ次

源ノ定信

たこにだにたもとをぬらす時雨かなまきの板屋のよるのねざめに

千鳥をよめる　○冬、あはぢしまかよふ千鳥のノ次

神祇伯顯仲

風はやみこしまがさきをこぎゆけばゆふ波ちどりたちゐなくなり

寄泉戀をよめる　○戀上、これにしくは思はなきをノ次

こしよりの朝臣

わが戀はたぼろのしみづいはでのみせきやるかたもなくて暮しつ

忍戀の心を讀る　○戀上、よもすがらくさの枕にノ次

神祇伯顯仲

しらせばやほのみしま江に袖ひちてなゝせのよどに思ふこゝろを

人にかはりて　○戀上、つくめどもなみだの雨のノ次

春宮ノ大夫公實

しらぎくのかはらぬ色もたのまれずうつろはでやむ秋しなければ

攝政左大臣家にて寄花戀といへる事をよめる（戀上うたゝねに）

源雅光

ふく風にたへぬこずゑの花よりもこゝめがたきはなみだなりけり（あふとみつるはノ次）

戀の心をよめる（戀下、みちのくのおもひしのぶにノ次）

皇后宮權大夫師時

人しれぬこひをしすまの浦びこはなきしほたれてすぐすなりけり

皇后宮にて山里戀といへる事をよめる（戀下、めづらしやいはまによどむノ次）

左京大夫經忠

山里のたもひかけひにつらゝゐてこくるこゝろのかたげなるかな（戀下、たまさかに波のたちよるノ次）

忍戀の心を讀る

源親房

ものをこそしのべばいはねいはしろのもりにのみもるわが涙かな

寄關戀をよめる（戀下、人はいさありもやすらんノ次）

源俊頼朝臣

なこそてふことばは君がことぐさをせきの名ぞとも思ひけるかな（ことばモトことなばトアリ今散木集ニヨル）

ロチ抄ニアリテイハニホニ無キ歌

題しらず（戀下、あふごなき物としるくノ次）

よみ人しらず

うゝましや木のしたかげのわすれ水いくらの人のかげをみつらん

右ノ歌イニ無キハ傳寫ノ際ニ書キ落シタルナルベシ

イロホチ抄ニアリテハニニ無キ歌

返し（抄本雜上、うかりしに秋はつきぬとノ返歌）

藤原知信

虫のねはこの秋しもぞなきまさるわかれのこほくなるこゝちして

右ノ歌ホニアルハ後人ガ傳寫ニ臨ミテサカシラニ書キ加ヘタルナルベシ

イロハチ抄ニアリテニホニ無キ歌

山寒花遲といふ事を（抄本春、このはるはのどかに匂へノ次）

（此歌ノ事緒言作者考證ノ條ニ云ヘリ）

やまざくらこずゑの風のさむければ花のさかりになりぞわづらふ

左京ノ大夫經忠

題しらず（○春、あしがきの外とはみれどノ次）

花のみやくれぬる春のかたみとてあを葉のしたにちりのこるらん

盛經ノ母

冬ノ月をよめる（○冬、かきくらし雨ふるよはやノ次）

あらち山ゆきふりつもるたかねよりさえてもいづるよはの月かな

源ノ雅光

山寺に月のあかゝりけるに經のたふときをきゝてな

みだのたちければよめる（○雜上、このまもるかたわれ月のノ次）

いかでかはたもとにつきのやどらましひかりまちとる涙ならずは

平ノ康貞ノ女

題しらず（○雜上、みのうきなを思ひしとけばノ次）

よな〳〵はまどろまでのみあり明のつきせずものを思ふころかな

皇后ノ宮ノ美濃

衆罪如ニ霜露一といへる文をよめる（○雜下、いのちをも罪なもつゆにノ次）

覺譽法師

つみはしもつゆものこらずきえぬらんながき夜すがらくゆる思に

龍女成佛をよめる（○雜下、けふぞしるわしの高ねにノ次）

勝超法師

わたつみの底のもくづとみしものをいかでかそらの月となるらん

ごくらくをねもふといへる心を（○雜下、よとともに心のうちにノ次）

源ノ俊頼朝臣

よものの海の波にただよふもくづをもなゝへの網にひきなもらしそ

（○連歌、あさまだきからろの音のノ次）

よみ人しらず

花くぎはちるてふことぞなかりける

前ノ太政大臣ノ家ゆふしで

（ロニ源師俊朝臣トアリ散木集ニ見エズ）

風のまに〳〵うてばなりけり

以上三十首校訂金葉集ニハ削除シタリ

イロハホチ抄ニアリテ**ニ**ニ無キ歌

郭公をよめる○夏　藤原成通朝臣

ヤアリ但シ字ホ　ほゝとぎす一聲なきてあけぬればあやなくよはのうらめしきかな

月の心をよめる○秋　藤原家經朝臣

ヤアリ但シ字ヘ　今よりはこゝろゆるさじつきかげのゆくへもしらず人さそひけり

落葉隨風といへる事をよめる○秋　太宰大貳長實母

ヤアリ但シ字ト　いろふかきみ山がくれのもみぢばをあらしの風のたよりにぞみる

そらごといひて久しく音せぬ人のもとにいひつかはしける○戀　さがみ

ヤナシ　ありふるもうき世なりけり長からぬ人のこゝろをいのちゝもがな

寄三日月一戀をよめる○上戀　藤原爲忠

ヤナシ　よひのまにほのかに人をみかづきのあかでいりにし影ぞこひしき

物たもひ侍ける比月のあかゝりける夜あかざりしに

もかげ常よりもたへがたくて讀る○下戀　橘俊宗女

ヤナシ　つれ〳〵こたもひぞいづるみし人をあはでいく月ながめしつらん

返し○雜　賀茂成助

ヤナシ　住よしのまつかひありてけふよりはなにはの事もしらすばかりぞ

依二釋迦一遺教一念二阿彌陀一といふ事をよめる○下雜　皇后宮肥後

ヤアリ但シ字ヘ　をしへたきていりにし月のなかりせばいかで心をにしにかけまし

以上八首モ校訂金葉集ニハ削除スベキナレド他ニ**ニ**本ト同一

ナル本ヲ見ヌ限ハニ本ニ見エザル歌ハ悉ク撰者ノ除キシ歌ナリヤ或ハ其中ニハ後人ガ傳寫ノ程ニ書キ落シシ歌モアラザルカ確ニハ知リ難シ。サレバ今ハ削除セズシテ存ゼリ

異本歌

ニ本ニ見エタル歌

攝政左大臣家にて戀の心をよめる（抄本戀上、みづとりの羽風にさわぐノ次）　藤原爲眞朝臣

あふことのなきをうきたの杜にすむよぶ子鳥こそわが身なりけれ

たのめてあはぬ戀（右ノ歌ノ差次）　藤原親隆朝臣

こひしなでこゝろづくしに今までもたのむればこそいきの松ばら

山の歌合に戀の心を（戀上、おもかげは數ならぬ身にノ次）　隆覺法師

身のほどをたもひしりぬる事のみやつれなき人のなさけなるらん

戀の心を（戀上、あひみてのあからばノ次）　琳賢法師

あくといふ事をしらばやくれなゐのなみだにそむる袖やかへると

イ本ニ本ニ見エタル歌

題しらず（戀下、あふことはかたねぶりなるノ次）　よみ人しらず

いとせめてこひしき時ははりまなる飾磨にそむるかちよりぞくる

明治四十二年十月　井上通泰　校訂

終